

シュトラール・イン・
シュテルンツェルト

一意専心

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

どことなく悟りを開いたような、有り体に言つて面倒臭い人間を極めたようなそんな
人間だった主人公。たまたま寄り道した路地裏で通り魔にあつてしまふ。ひつそりと
息絶え、目が覚めた時には??。

これは、僕つ娘ダウナー系TS転生ウマ娘になつた元男がメジロ家のアレコレや、ト
レセン学園での青春○の中で一人の人間として輝きを完成させるお話。

※一応モチーフとなつた競走馬はいますが、二次創作でも都合上オリジナルというこ
とで進行します。

※オリジナル展開は主に原作で語られていない部分。オリジナル設定は学年その他

諸々の整合性確保。史実改変はモチーフ競走馬よりもちよつとだけ豪華な戦績。

※実在する牝馬のメジロシユトラールとは全くの別物です。モチーフでもあります
ん。注意書きを忘れていました??。

目 次

プロローグ

第一話 転生	
第二話 劣等生	
第三話 幼き天才	
第四話 メジロの同期	
第五話 星空の中の輝き	
第六話 託されたもの、目覚めるもの。	
第七話 あたしの王子様	
第八話 恐れの芽生え	
トレスセン学園編	
第九話 入学	

64 56 47 37

第十話 出会い

第十一話 微熱	
第十二話 選抜レース	
第十三話 片鱗、または余波	

102 93 84 74

プロローグ

第一話 転生

人間は生まれ変わる。

そういう話は古来から好まれ、現代にまで受け継がれてきた。

輪廻転生だと、そういう感じのアレだ。一昔前までは縁遠かつたはずだが、最近ではライトノベルのジャンルとしても大衆に嗜まれ、考え方次第では身近になつた存在である。

その話題を出すのなら、お前は輪廻転生論を信じてゐるのかつて？

冗談。

僕は信じちやいない。

正直な話、社会の荒波に揉まれて不本意ながらリアリスト思考を人生の基盤としてしまつた今の僕に、その手の話題は全くもつて刺さらない。

満ち足りてゐるわけでも、世捨て人であるわけでもないよ。ただ、そうなだけだ。

人は、死んだら土に還る。または燃やされて灰になり、壺に収められるか海に流されるか。結局のところ、末路はそこだ。

生まれてこの方、世界水準では恵まれた環境で育ち、まあまあの学歴をまあまあの努力で手に入れて、社会人として人生を全うしている僕も例外じゃない。

ああ、でも。でも、もしかしたら。

もしもそうなのだとしたら。

「??ははは。誰か??僕を、中途半端な奴だと笑ってくれよ」

誰かに後ろから刺された。

そうして、こんな寂れた路地裏で月に看取られながら息を引き取ろうとしている僕は、実は転生というのに、違う自分というものに憧れていたのかもしれない。

だって、今この時、人生の終わり目にそんなことを考えているくらいだ。そうに違いないだろう。

先まで輪廻転生を信じていなかと言っていたのに、こんなに中途半端な人間は有史以来僕が初めてなんじやないか。笑えない。

打ち捨てられた生ゴミと都会に染つた污水、息を潜める小さな命。冷酷なまでに何の感慨も抱かない月。少し遠くなつた大通りの喧騒は、却つて幻想的なまでに僕を世界から遠ざける。

冷たさに体の奥、魂のような何かから同化していくようだ。

面白いだろう？ 僕は、詩も読めるらしい。どうしてか頭が冴え渡つていてるんだ。今

なら何でも出来そうだよ。皆の大好きな転生だつて出来てしまいそうだ。

ああ、そうだね。もし、来世があるのだとすれば。

願わくば、来世くらいは??。

うん。

来世くらいは、心の底から悔いのない人生つてモノを送りたい。

始まりと挑戦に打ち震え、悔しさと失意の底に沈み、希望と情熱に焦がされて、屈託のない喜びに溺れたい。そんな人生を送りたいものだ。

それくらいのささやかな願いなら、こんな僕にも許されるだろう？



「??貴女の名前はメジロシユトラール。メジロ家の栄光を背負つて立つ光として頑張りなさい」

厳かさの中に温かさの込められた声、瞼を貫いて眼を突き刺すような光。

目を開けるも、薄らと膜が張つているような視界のせいで何も判別できやしない。明るさから、今が昼頃かと推測できるくらいだ。

「お母様、この子はやれます。きっと」

「??ええ。彼女ならば、名門メジロに春を齎してくれることでしよう」

誰かが話しているが、内容まではしつかりと聞き取れないことから、目同様に耳も退化ないし衰えているようだ。体も動かしにくい。僕はどれほど寝ていたのだろうか。

??しかし、病院のベッドというには不可思議だ。

シーツの感触ではない。何か、もつとこう温かみのある感触。まるで人の温もりのよう??。

??人の温もり?

「さあ、今日はもう休みなさい。シュトラールは主治医に任せて」

「はい、お母様」

気が付くと、僕は誰かに抱えられていた。

そう、抱えられていた。

身長そこそこな大の大人の僕である。そんなの常識的に考えてありえない。

ここまで来れば、もう薄々気が付いていた。僕が今、どのような状況に置かれているのかを。

「シュトラール、貴女ならやれる。ウマ娘として、メジロの娘として使命を果たすのです」

何を言われているのかは分からぬが、何やら大きな物を託されてしまつたのは分か
る。

全くもつて勝手な事だ。傍迷惑とまでは言わないが、せめて理解出来るまで成長して
からにして欲しい。

?? 何はどうあれ。

――どうやら、期せずして僕の第二の人生は幕開けを迎えてしまつたようであつ
た。

第二話 劣等生

何の変哲もない短めな一生を終えて、どういう因果か本当に転生。

メジロシユトラールとしてこの世に生を受けてからはや五年。

この五年間、僕は常に驚嘆させられっぱなしであつた。

まず挙げるべき事柄は、なんと言つても前世とは性別が違うということだ。というか、そもそもその話として種族が違つた。

『ウマ娘』。

僕はそう呼ばれる存在らしい。所謂馬のような耳と尻尾を持ち、馬と似たような体質を持つ靈長類の一種という扱いだ。

この世界は前世の日本とほとんど相違無く、唯一と言つても良い違いがこのウマ娘なる存在の有無のみ。

教えられた知識から推測するに、異世界、恐らくは僕の前世の世界で活躍した競走馬達の名前を受け継いでいるようだ。

逆に、僕が知つているような前世で言う馬は存在しない。

表記もウマとかバになつており、ごく一部で馬っぽい字が使われているくらいだ。試

しに僕の知る馬という字を書いたら漢字間違いとしておばあさまに正されたのは記憶に新しい。

せつかく転生したからには今までとは一線を画すような体験をしたいなんて我ながら手前勝手過ぎる期待を寄せていたが、まさかこういう形になるとは予想だにもしていなかつた。

それともうひとつ前世より大きく違う点があるとすれば、この世界では前世で言うオリンピックレベル、またはそれ以上にウマ娘達による競走、競馬が浸透していることか。

ただ、賭け事と言うよりかは本当にアスリートのソレ。

前世じや競馬といふものに欠片程の縁もゆかりも無い人間であつた僕からすればこの世界の一般常識には違和感しかなかつたが、しかしこうも国民的世界的となれば賭け事に対する忌避感、もしくは競馬に対する賭け事というイメージが薄れていくのは必然的であつた。

今は受け容れています、ちゃんと納得も理解もしている。

それに拍車をかけるようだが、僕の生まれた家、メジロ家の存在も大きかつた。

メジロ家は、代々優秀なウマ娘を輩出してきた名門と呼ばれるような家系らしい。家にはそこかしこにトロフィーや盾が飾られていた。

僕もそんなメジロ家のウマ娘として恥じない戦績を、特に天皇賞の盾を持ち帰ること

を期待されている。

その為に、本格化もまだ先である幼児期から既にトレーニングを積むことを課されていていた。

最初は慣れない感覚に戸惑い、幼児にやらせるとは思えないような厳しいトレーニングに悪態をついていたものだが、ウマ娘だから走ること自体は好きらしく、いつの間にかトレーニングを自分から積極的にこなすようにもなっていた。

転生したのだ。何かやりたい。なんでも良い。努力の実を結ばせたい。そう思えば思うほどに、僕のやる気は燃え上がった。自分のことながら現金極まりない。

「シユトラールさん」

「??はい、おばあさま」

「??トレーニング中に余計なことを考えていたのがバレてしまつただろうか。」

現役を退いて長いおばあさまであるが、信じられないくらいその眼光は霸気に満ちていた。

全てを見透かされているような、そんな錯覚すら覚えるようなおばあさまの指導は的確で、僕以上に僕のことを理解しているのではと考えてしまう程である。

「差しと追い込み、貴女にはこの二つを武器出来る脚質が備わっています。まずはこの二つを使いこなせるようにならなくてはなりません」

ウマ娘の走りには大別して、最初から全力で飛ばしていく逃げ、逃げを追い掛け途中から全力になる先行、後方から力を温存して隙を窺う差し、最後尾から徐々に上げていく追い込みの四種がある。

僕には、その中でも差しと追い込みの才能があるらしかった。
だが、僕には一つだけ問題がある。

「貴女は、少しばかり身体に恵まれていません。しかし、その身体の強化を終えた時、貴女は生粋のステイヤーとして開花することは間違いない」

「?はい」

僕としては普通に幼児なんてこんなものだと思うのだが、おばあさまに言わせてみれば僕の体格はウマ娘として劣等生らしい。

そこまでハツキリと言われたわけではないが、少し考えたら考えていることくらい分かる。

体格さえもう少し恵まれていればと、そう言う感じの無念さが伝わってくるのだ。
けれど、僕は同時にこうも思った。

そんな僕が実績を、天皇賞・春辺りを勝ち取れたならば、それは僕が生きた軌跡そのものになるのではないか、と。

「おばあさま、僕はやります。絶対に、メジロ家に盾を持ち帰つてみせます」

「期待していますよ、シユトラールさん」

僕は、その言葉に強く頷いて、もう一度ターフを蹴るのであつた。

□

「はああつ！」

グラウンドを駆ける孫を、ただ見つめる。出来うる限りのアドバイスをするべく、ひとつつの問題点も見逃しはしない。

??いいえ、むしろ問題点だらけと言うべきでしようか。

体格は悪く、タイムもこの年代という点を加味しても良いとは言えない。

五歳の子供とは思えないほどに聰明な彼女ならば、私の言葉の真意も分かつているはずです。

けれども、それを伝えることなんて出来るはずもない。

それに、思うのです。

「??もう一本お願ひします」

伸び悩むタイムを見ても、折れることなく挑み続ける彼女。

そんな彼女ならば、本当にメジロ家に春を齎してくれるのではないか、と。

暗雲のさなかに差し込む光となつてくれるのではないか、と思うのです。
だから、私は彼女を応援し続ける。
ウマ娘として、本懐を果たすその日まで。

第三話 幼き天才

「シユトラールおねえさま」

トレーニング終わり。夕日の差し込む廊下をタオルで汗を拭いながら歩いていた時のこと。

ふと迥々しい声に呼び止められた僕は、極力表情を和らげることを意識しながら振り向く。

一度、声を掛けてきた子とは別の子だが妹分的な存在に何も考えずに接した時、怒つてていると勘違いされて泣かれてしまったのだ。

確かに仏頂面なのは認めるが、まさか泣かれるとは思わなかつた。弁明が面倒だつたが、今となつては良い思い出だ。それ以来、年下や同年代と会話する時はなるべく仏頂面にならないように気を付けている。

「やあ、マックイーンちゃん。僕に何か用でも？」
「はい」

そこに居たのは従姉妹のメジロマックイーン。

淡く色付いた髪は、銀色にも薄紫色にも見える。白髪や銀髪と一言に呼ぶのは前世観

を持つ僕くらいなもので、ウマ娘として芦毛と呼ばれる髪質に分類されるのだとか。鹿毛の僕の茶髪よりも映えていて綺麗だというのは間違いない。

この子は、七歳の僕の二つ歳下。五歳にしては、ズルをしている僕程でないにしても早熟で聰明な子だ。

そんなマックイーンの畏まつた雰囲気を感じ取つた僕は、大人しく耳を傾けて言葉を待つた。

「シユトラールおねえさまは、どうしてあんなにがんばれるのですか？」
「?」

てつきりもつと子供らしい内容を想定していた僕は、不意打ち氣味の問いに暫し固まるふりを余儀なくされた。

実際、七歳となつた僕はおばあさまから課される七歳用のメジロ家トレーニングメニュー以上のトレーニングを重ねている。

今日だつて午後に入つた頃にはノルマは終わつていたが、こんな時間になるまで追加のトレーニングに打ち込んでいたというわけだ。

恐らく、それを見られてしまつたのだろう。

しかし、何故と問われると答えにくい。

簡素に答えるならば、本当に簡単なことなのだが、それで納得してくれるだろうか。

「マックイーンちゃん。僕はね、とつても弱いんだ」

「弱い???」

「うん。ウマ娘としての人生の中で、僕はほとんど全て未熟者として努力し続けなきやいけない」

なんとか頭を捻つて五歳児にも分かるように分かりやすくと思うのだが、どうにも難しい。

僕の置かれている現状は、正しく名門の生まれでありながら凡庸未満の劣等生。だが、それをそのままマックイーンに伝えるのはどうかと思つたのだ。

マックイーンは天才だ。

僕なんかとは比べ物にならないようなポテンシャルを秘めている。

五歳の頃の僕は一日のトレーニングノルマを達成するだけでも割と一苦労だったものだが、マックイーンはそんな僕の苦労なんて大したことないと一蹴できるくらい容易くこなしてしまう。

それを天才と言わずしてなんと言うのか。優等生と呼ばずしてなんと呼べば良いのか。

少なくとも、メジロ家においてはメジロマックイーンというウマ娘こそ、最も理想的なウマ娘と言えるだろうことは間違いない。

「でもね。僕だつて輝きたい、僕という存在を皆に刻み付けたい、磨き上げた僕の力が強いウマ娘達に通用するつてことを証明したいんだ」

「しょう、めい??」

「そう。つまりさ」

証明なんて言葉、今のマックイーンに分かるはずもない。

ここまで僕の紡いだ言葉だって、その如何程を理解出来ることか。

僕の本当の願望を理解出来るのは、僕以外に居ないのだから。

限りなく簡潔に言おう。

差し込む夕日に照らされて、これから言うセリフを恥ずかしく思いながら、僕はマックイーンを真っ直ぐに見つめて口を開く。

「——僕は、勝ちたいんだよ。絶対に負けたくないんだ」

「?! かち、たい??」

きっと、彼女もなんとなくでも理解出来たはず。

僕自身、まだまだ明確なことは分からぬ。もしかしたら一生分からぬかもしけなり。

けれども、ウマ娘としてレースに出て勝つことに、僕が転生した何らかの意義があると僕は思っている。

前世含めいい歳こいて青臭いことを言つてている自覚はある。

今は、この頬の紅潮が夕日に誤魔化されていてくれることを祈るばかりだ。

懐から人参ステイツクのジップロックを取り出した僕は、マックイーンにそつと手渡して耳元で囁く。

「僕がオーバーワークしてたことは、おばあさまには内緒にね」

買収完了。

一安心した僕は、知識を深める為にそそくさと図書室へと向かうのであつた。



『――僕は、勝ちたいんだよ。絶対に負けたくないんだ』

そう言つたあの日のシユトラールお姉様の顔を、今でもわたくしは鮮明に思い出せます。

中性的な容姿に中性的な話し方。何処か不思議な雰囲気を纏つた霞のような方です

が、レースに対する姿勢はわたくしの知るどのウマ娘よりも真摯そのもの。

あの言葉に込められた純粹な渴望を、幼い日のわたくしは知らなかつた。けれども、今なら分かる。

あの時一人、メジロ家のトレーニング施設で己の体を鍛え上げていたシユトラールお姉様は、ライアンのように筋肉理想を求めていたわけではない。

ただ、強くなる為に足りない部分を手に入れようと必死にもがいていた。足りないなら足りないだけ、欠けているなら補える分、そしてそれ以上に努力を重ねる人だつた。

その結果が、菊花賞。そして、天皇賞・春。

菊花賞。エルコンドルパサー先輩とスペシャルウイーク先輩のように、写真判定の末のマチカネフクキタル先輩との同着には会場が沸き立つた。私も、思わず立ち上がりつていた。

天皇賞・春。キンイロリヨテイ先輩や、シルクライトネス先輩などといつた面々を相手に二バ身差で勝利したあのレースは、メジロ家の名誉と栄誉の為に走る私にとつてどれだけ心強かつたことか。

だから、私はシユトラールお姉様を超えて、私の手で得た盾をメジロ家に持ち帰る。シユトラールお姉様に、勝つ。

お姉様の手から奪い取る盾だからこそ、万金にも変え難い価値があるのです。

「次の天皇賞。メジロの家に盾を持ち帰るのは、このわたくしですわ」
「?? そうか。なら、僕も尚更負けられないな」

紫紺の眼が私を捉える。いつもの理知的で穏やかなものとは違う凍てつくような、敵を見るような視線。

やつと、わたくしのことを見てくれた。遂にここまで辿り着いた。
わたくしの差し上げた白いマフラーを靡かせながら、シユトラールお姉様は不敵に微笑んだ。

第四話 メジロの同期

「はつ、はつ、はつ」

森の中に作られた、ウマ娘基準で言えばかなり小さな芝コース。

ほとんど誰も来ないここで一人、追加トレーニングに勤しむのが僕の日課となつていた。

「はつ、はつ、はつ??つ！」

ターフに力強く踏み込み、ラストスパートにかけて徐々に速度を上げていく。
三十周目。そろそろ足と肺が苦しくなつてきたか。

だが、そこからが肝心だ。限界を突き詰めていかなければ、僕の身体は強くならない。
僕の想いに付いてくれる肉体は生まれない。

「はあっ！」

残り100m。最高速に乗つて駆け抜ける。

だが、遅い。

勿論、生身の人間などとは比べるまでもなく早い。しかし余裕の有る無しに関わらず、僕の最高速は九歳になつてもウマ娘としては大したことは無かつた。

けれど、決め手にこそ欠けるものの、こと長距離に関してはかなり仕上がりがつってきたよう思う。そこは素直に喜びたい。同年代の他のメジロ家のウマ娘と比べても、僕の脚は何倍も長く使えた。

長距離ランナーのことをステイヤーと言うらしいのだが、僕にはそのステイヤーとしての素質が大きいにあるらしい。ステイヤーは中距離においてもそれなりにやれるウマ娘が多いらしいので、活躍の幅が広がるのは僕としても願つたり叶つたりだ。

もう一周、そう思つて踏み込もうとしたその時であつた。

「シユトラールさん」

おばあさまの声に呼び止められる。

しまつたと思った。

何せ、今日の分のトレーニングは既に終わつてているのだ。

僕がハードトレーニングを積んでいるということはおばあさまには伝えていないこと。

それをまさか本人に見られてしまうとは。

これで、ノルマ以上のトレーニングを禁止されでは困る。

どう弁明しようかと頭を回していると、おばあさまの後ろに隠れる同じくらいの背丈の人影が目に付いた。

「ドーベル??」
「??シユトラール」

メジロドーベル。

僕と同じ年のウマ娘で、彼女の方が若干黒味を帯びているものの、よく似た色合いの長髪が綺麗な将来美人になりそうな顔立ちの少女である。僕やマックイーンとは違い、ステイヤーよりも中距離やマイル向きのスピードが出せるウマ娘だ。それは、時々メジロ家内で行われる模擬レースでの彼女の走りを見た時から確信していた。

もしかして彼女がおばあさまに報告したのだろうか。

そう考えたが、すぐにそれはないと思い至る。

僕と彼女は同じ年だが、話したことはほとんどない。

僕としては身の回りにあまりいない同年代のウマ娘である彼女と交流したかったのだが、なんとなく彼女に避けられているような気がしたので、こちらから話し掛けることも出来ず。

九年間、まともに会話をしたことすらないのだ。

ほとんど接点の無い彼女が、僕のことをおばあさまに密告するとは思えない。

「シユトラールさん、貴女、ここ最近は特にオーバーワークが加熱しているようですね」

「え」

その口振りからすると、もしかして誰かに密告されるまでもなくおばあさまにはバレていたとでも言うのか。

いや、この人の慧眼ならばそれもおかしくは無いと思えてしまうのが恐ろしい話だ。呆然とする僕を他所に、おばあさまは続ける。

「本当はそんなオーバーワークは今にも止めさせたいところですが、ひとつ提案があります」

「?? 提案?」

提案、というのが今もなお警戒心を露わにしてこちらを見つめるメジロドーベルに關係しているだろうことはすぐに分かつた。

「今後、追加で自主トレーニングを行うのであれば、この子と一緒にやること。その条件が呑めるなら、ある程度のオーバーワークにも目を瞑りましょう」
なるほど、そう来たか。

おばあさまとしても、僕がオーバーワーク気味でも自主トレーニングに打ち込むのを止めたくはない。けれども、過剰になればそれは毒となる。

だから、ドーベルと一緒にトレーニングさせることで、ドーベルにも鍛錬を積ませ、僕のやり過ぎを緩和する狙いがあるのでだろう。

まあ、確かに最近はちょっとやりすぎな気もしていたし。

「??分かりました」

「それは結構。ですが、今日はもう時間も時間です。切り上げては如何ですか？」

提案を受け入れると、おばあさまは満足気に頷いた。
言われてふとじいやから貰った腕時計に視線を落とすと、時刻は十八時を回っていた。

いつもなら十九時くらいまでやるのだが、中断もあつたし今日はもう続ける気にはなれない。

明日からの自主トレーニングはどうしようかなどと考えながら、僕はおばあさま達の後を追い掛けて帰路に着くのであつた。



「じゃあ、今日も一日頑張ろうか」

「頑張るって言つても、もうノルマは終わつてるけど」

「まあ、それはそれとして」

ストレッチをしながら、少し辛辣氣味に言葉を投げるが、シユトラールは飄々とした態度を崩さない。

昔から、シユトラールのことは苦手だつた。

どこか大人びていて、冷静で、他のメジロの子達とも線を引いていたのは知つてゐる。けど、アタシが彼女のことを苦手に思つてゐるのは、その雰囲気故だ。

アタシは男の人が怖い。視線でも何でもだ。

シユトラールは、物腰穏やかで中性的な話し方をする。そのせいなのか、どうにも彼女と話すと大人の男性と話してゐるようなイメージを抱いてしまうのだ。
せつかく唯一の同い年なのだから、話してみたいとは思うものの、上記の理由からなかなか上手くいかず。

結局狡いアタシは、シユトラールが自主トレーニングをやり過ぎてることをおばあさまに密告した。アタシと一緒にトレーニングさせるよう説得することも頼んだ。

おばあさまはアタシが密告するまでもなく知つてゐる様子だつたが、私の頼み事を聞いた時は珍しく嬉しそうな風だつた。

シユトラールは、自分のことを未熟者だとか劣等生だとか卑下するけど、シユトラールのことをそう思つてゐるのは多分シユトラール本人だけだろう。

日々のトレーニングは裏切らない。それを実証するかのように、彼女はステイヤーとしてどんどん強くなつていつてゐる。何れは、手が届かないところにまで行つてしまふくらいに。それが分かる。

アタシはそんなシュトラールに追いつきたい。
置いて行かれたくない。

だつて、同じ年だから。子供っぽい理由だけど、アタシにとつてはそれで十分だつた。

「ほら、後五周したら休憩だから頑張ろう」

「つ、まだまだっ！」

「??へえ。じゃあ、僕も??っ!!」

アタシの加速に合わせて、さらに加速するシュトラール。その距離は縮まることなく、一定間隔で変わらない。

並ぶどころか後ろに追い付くのもまだまだ先になりそうだ。

だけど諦めない。だから、アタシは今日もシュトラールの背を追い掛ける。

いつか隣に並べる日を夢見て。

第五話 星空の中の輝き

じいやに貰つた懐中電灯片手に、それも要らないくらい明るい星空に照らされた森の中を進む。

後ろにはこの一年間、僕のハードトレーニングに食らいついてきた天才、同期のメジロドーベル。そして、メジロマツクイーンにメジロライアンの二人がいる。ライアンとマツクイーンに誘われる形で、僕達は今夜の夜空を観測する為にメジロ家の敷地の平野へと向かっていた。

なんでも、今日は星空がとても綺麗に見えるのだとか。

別に口マンス溢れる星空を観たいとか、そんなことを思つたわけではない。

だが、転生してからこの方トレーニングばかりに打ち込んで、家族との交流みたいなそういうのは疎かにしてきた手前、息抜きとか交流とかそういうのを引き合いに出されると断りにくかつたのだ。

「ねえ、シユトラール」

明日の追加トレーニングはどうしようかなどと考えながら三人を先導して歩いてくると、ドーベルが肩が着くくらい真隣に並んでくる。

一年前までは目線もあまり合わせてもらえないくらい避けられていたのだが、最近ではそんな様子も全くなかった。むしろ、ちょっと距離が近過ぎる気がしないでもないが、女子同士の距離などこんなものだろう。

片方が僕という複雑な存在でなければ、だが。

「なんだい？」

「その??いいえ、なんでもない。ただ、シユトラールもこういうのに興味あるんだなって」

「まあ多少は、ね。星空なんてあんまり気にしたこと無かつたし、新鮮だな」

「こういうのつてなんだこういうのつて。普通に星空と言え。なまじ、僕が中身男なついで変な風に聞こえるぞ。

??なんて言えるはずもなく。

曖昧に濁して歩みを進める。もうそろそろ着くはずだ。

「マックイーンちゃん、ライアンちゃん、眠くないかい？」

「大じょうぶです！」

「わ、わたくしも平氣ですわ??ふわあ」

時刻は既に十一時を回っている。

じいや達に許可は取っているが、まだまだ幼いマックイーンやライアンはとっくに

ぐつすり眠っていてもおかしくはない時間だ。

念の為に確認すると、ライアンからは元気そうな応えが返ってくるが、マツクイーンの方は眼を擦りながら眠たげに返してくる。

まあ、おばあさまからの期待が特に大きいマツクイーンは、身体の成長が見込めるこの時期だからこそ規則正しい生活を徹底させられているのだから仕方が無いと言えばそうだ。

ライアンは?? 多分、普通に元気なだけだろう。なんでマツクイーンは眠たそうなのにライアンはこんなに元気なのか皆目見当もつかない。

ここにいるドーベルやライアンもそうなのだが、ドーベルは僕と一緒にトレーニングを始めてからちよつとだけ抑圧が和らいだと喜んでいた。

僕はと言えば、特に期待されているわけでもないだろうし、そういうつたお家の束縛みたいのは微塵も無い。

強いて言えば、ズボンばかり履いているとたまにはスカートを履くように言われたり、髪を短くしようとすると苦言を呈されたりするくらいだろう。

とはいって、邪魔な物は邪魔なので髪の毛はいつも後ろで一本に纏めている。それに、最近はスカートにも慣れてきたが、やっぱり圧倒的にズボンの比率が多いのは元男故に仕方が無いのだ。妥協してもらうしかない。

「行こう、マックイーン！」

「ラ、ライアン、待ってくださいまし！」

あれこれ考えながら歩いていると、木々が段々と拓けてくるのが分かつた。着いたか、そう思ったのも束の間、ライアンと彼女に手を引かれたマックイーンが僕とドーベルの間をすり抜けて駆けて行く。

ドーベルと顔を見合わせれば、どちらからともなく笑みが漏れた。

「シユトラールお姉さま、ドーベル！ 早く！」

「分かった分かった。足元暗いし急ぐと危ないよ」

「なんでアタシだけ呼び捨て??」

感化されたのか、眠気など吹き飛んだ様子のマックイーンに急かされて歩みを速める。

ドーベルは僕がお姉さまと敬称を付けられているのに、自分だけ付けられていないことに不満な様だ。どうしてドーベルだけ呼び捨てなのには知らない。

ドーベルを宥めながら、ゆっくりと森を抜ける。

そして、僕はその先に広がる光景にはつと息を呑んだ。

「つ?!」

世界が変わる。

所謂天の川、というやつか。

無数の星々という光源に照らされた草原は昼のように明るく、見上げた星空は現世と隔絶した様相を示す。

今まで見たこともない真新しい世界に、価値観が更新されていった。
僕の中で前世から積み重なってきた凡愚さ^{つまらなさ}を煮詰めた汚泥が、綺麗さっぱり吹き飛ばされる。

「??凄い」

「??ええ、本当に。言葉も出ないわね」

天の川流れる夜空は、暗いところを探す方が難しいくらいたくさんの中の星に彩られていた。

一つ一つの星が輝きを放っているかのようだ、何十何百光年と離れた星光。

前世じや見たことなんて一度も無いような、妄想よりも幻想的な光景。月並みな言葉だが、それ以外に表現出来ないような景色。

どれが何の星か、どの形が何の星座なのかなんてひとつも知らない。前世の僕は興味も無かつたから。

けど、星空がこんなに綺麗なものだなんて知らなかつた。

今世も含めれば優にアラフオーナ僕は、星空の美しさを知らなかつたんだ。

「いや??本当に凄いな」

「??シユトラールでも、そんな風に感動することあるのね」

「ドーベル、君は僕を何だと思つてるんだい?」

「おかしなウマ娘」

「君なあ??」

ドーベルからの評価は心外だが、普段なら問い合わせたくなるような言動も気にならな
いくらい僕はこの星空に魅せられていた。

今この瞬間だけは、自分が前世を持つ転生者であるとか、ウマ娘という存在であると
か、そんなこと忘れ去つてしまいそうだ。

呆然と見上げていると、マツクイーンが感慨深げに口を開く。

「前に、おばあさまが言つてらしたの。この星空に浮かぶ星々の一つ一つが、ウマ娘の輝
きだと」

「??あの人でも、そんなロマンチックなことを言うんだね」

おばあさまは基本的に理想を掲げるリアリストだ。メジロの全てを見極め、その決断
には迷いも情けも無い。

でも、そんなおばあさまの言葉だからこそ重みが違う。

確かに、これだけの星々全てが過去未来現在と連綿と紡がれてきたウマ娘達の軌跡だとすれば、それはあまりにも??。

いつの日か、僕がこの星の中で光を放つ日が来るのだろうか。

??いや、それは全て僕自身の努力に寄るか。

軌跡とは、僕が歩んだ道そのものだから。

それくらい、これまで人生をなあなあに済ませてきた僕にも分かる。

「あの、シユトラールお姉さま??これを」

「?」

マックイーンがおずおずと封をされた紙袋を手渡してくる。

受け取ると開けるように促されたのでテープに爪を引っ掛けで綺麗に封を開けてみれば、中には新品の白いマフラー。隅に一つだけ星の刺繡が際立っていて、可愛らしくも格好よさも兼ね備えている。

しかし、マフラーか。というか、そもそもなんでこれを?

「ちょっと季節がおかしいとは思つたんだけど、この前蹄鉄を買いに出掛けた時にマフラーを見てたから欲しいのかなって」

「それで、みんなで買ったんです! プレゼントにちょうど良いかなって思つて」

なるほど。

まあ、その時は確かにちょっと寒かつたし、前世でもマフラーはなげなしのファッショングで時々巻いてたこともあって、何となく眺めてはいたが。貰えるなら嬉しい。

けど、どうしてプレゼント？

「?? シュトラール、もしかして今日が何の日か知らないの？」

「え。今日は、四月十九日だけど?? 特に何の祝日とかでもなかつたはず」

祝日は英気を養うためにも丸一日休みにするし。今日は学校から帰つた後も普通にトレーニングしたし、星空を見る為に少しだけ早く切り上げたものの、ドーベルと追加のトレーニングも行つた。

そうなると、思い当たる節がない。

答えを求めて視線を向ければ、何がおかしいのかドーベルもマックイーンもライアン

も笑いを堪えていたようだつた。

「?? ふ、くく。シュトラール、自分の誕生日も覚えてないのね」

僕の、誕生日？

?? ああ、そうか。そう言えば、確かに今日は僕の誕生日だ。今日で十歳になる。

けど、僕が忘れていたことをどうして三人は覚えていたのだろうか。

「前から、シュトラールお姉さまの誕生日のお祝いをしようとは思つていたのですが??」

「なかなかシユトラールの誕生日を聞く機会に恵まれなくてね。おばあさまに聞いたの」

そう言えば、誕生日なんて暫くお祝いされてなかつたな。

毎日ずっとトレーニングに時間を費やしているから、それも仕方ないけど。僕自身も忘れていくくらいだから、祝わなくとも全然良いのに。

「シユトラールさんにはいっぽいお世話になつてますから!」

「シユトラール、貴女、自分のことなんて聞かなきや何一つ話さないのに、私達の誕生日は律儀に祝うんだもの。ちゃんと貴女の誕生日もお祝いしなかつたら家族として不公平じやない?」

マックイーンやライアンは言わずもがな、同い年でも前世の分を含めたら圧倒的に年下なドーベルのことも体感的には姪のように感じてしまうので、勿論誕生日はしつかりお祝いしてきた。

けど、まさか僕が祝われる側になるとは思わなかつたな。

思えば、こんな風に誕生日を祝われるという行為をしつかりと受け止めるのは何年ぶりだらうか。

マフラーを紙袋から取り出して首に巻けば、通気性が良い素材であるのが分かつた。これなら、春や夏でも巻いていられそうだ。

「気に入つてくださいましたか？」

「??うん。とつても」

暖かい。心強い。

「ありがとう。大切にするよ」
僕に無い力をくれるような、そんな気さえする。

そう言うと、三人は顔を見合させて嬉しそうに微笑んだ。

??そうだ。そろそろ、僕も覚悟を決めなきやいけないだろう。

この星空に輝く星になること、三人からのマフラーに応えられるウマ娘になること。
後三年だ。三年しかない。トレセン学園に入れれば、実力以外は何の価値もない。そこまでには、最低限足りない部分全てを補えるだけの努力を積み重ねておきたい。

時間は進み続ける。待つてはくれない。

もう二度と、人生を何となくでは終わらせない。始めたならば、後戻りはできないんだ。

——たつた一度きりの人生に殉じる覚悟を。

僕は星空を見上げ、独り、固く決意した。

□

た。何処か、悲壮感に満ちたシユトラールの横顔をアタシは直視することが出来なかつ

第六話 託されたもの、目覚めるもの。

『■■、あなた、自分の人生なんだからあんまり遠慮してちやダメよ?』

「分かってるよ、母さん」

僕が高校生になつてから少しふくよかになつた母が、心配を多分に含ませた聲音で僕を諭す。

それに対し、この時の僕はと言えば特に取り合はることは無かつたか。

それなりに孝行して、世間一般に顔向けできたら良いくらいに考えていたのか。それとも、そうやって考えている振りをしていただけなのか。

これは夢だ。

何もかもが曖昧な世界で、僕は懐かしい頃、前世の母親とのことを夢見ていた。

父親はしょっちゅう単身赴任で家を留守にしていた。母はパートを掛け持つていて、ほとんどシングルマザーのようであつた。

女手一つで育ててくれた母に何かしら孝行はしたいな程度には考えていたはずだ。

けど、この夢の世界のように、この時の僕は何もかもが曖昧だつた。敷かれたレールの上、それなりに高い位置。座りが良い場所にずっと居座つて、時は過ぎ去るのだとい

うことを知らずにただただ無為に過ごしていた。

気が付けば、母は死んでいた。

死因はなんということは無い過労だった。

大学を出て就職し、忙しさにかまけて二年だ。何も出来ず母は死んでしまった。

孝行なんてする暇も無かつた。

いや、もつと僕が母のことを知り、母の為と頑張つていれば結末は違つたのかもしない。今となつては後の祭りだが。

思えば僕は、母のことを何一つ知らなかつた。知ろうとしなかつた。

母親とはそういうものだと、不变の存在だと思つていた節さえあつた。

何もかも遅過ぎたんだ。

『――、人生まだまだこれからなんだから。もつと楽しまなくちゃ、ね?』

母は常々、僕の人生を案じていた。

もつと楽しめと、もつと我儘に生きろと。

それを言うなら、母も母だ。

こんなクズに手間暇かけてないで、もつと樂すれば良かつたのに。

??甘えてたんだ、僕は。母の温かさに。心配してくれる人の存在に。
思い上がっていたんだ。僕は何でも一人で出来ると。母の死力はただのお節介でし
かないと。

その事実に気が付いたのは、死ぬ間際か。この世界に転生してからのことであつた。

□

母が倒れた。

その報せは、小学校五年のとある昼休みの時間に届いた。

迎えに来てくれたじいやの車に乗せてもらつて向かつた病院で、少し寝れた母は力無
く笑つて僕を出迎えた。

「シユトラール」

「なに?」

パイプ椅子を軋ませて、母に向き直る。

僕を見つめるその眼は倒れたとは思えないほど力強い意志を灯していた。

「お母さんはなんともないわ」

「?でも、倒れたって」

「ええ、そうね。もしかしたら、お母さんはもう歩けないかも知れない」

「??え?」

「いとも容易く打ち明けられた状態に、僕は頭が真っ白になつて固まつてしまつた。

僕が理解出来ていないとと思ったのか、母は強い口調でもう一度告げる。

「私の足はもう動かない、そう言つたの」

「??分かつてゐる。それくらい、聞いたから分かるよ。でも、どうして?」

母は何回か口を開きかけては口籠るのを繰り返した。言いにくことなら、無理に言わなくとも良い。そう言うと、母は弱く笑つた。

「前々から兆候はあつたわ。でも、いきなりよ」

「??母さんはそれで良いの?」

「良くないわ」

二度と歩けないとあつけらかんとした態度で告白したくせに、未練はタラタラ。ハツ

キリとそう言う母に驚きはしない。

むしろ、らしいなとさえ思う。

母は天皇賞に取り憑かれている。

メジロ家であることに誇りを持つて、僕をメジロのウマ娘足らしめんと尽力してきた。

古式奥ゆかしい仕来りや上品さではなく、メジロのウマ娘という存在そのものである
ように僕に求めてきた。

とはいへ、それはおばあさまも似たようなものなのだが。

「だからね、シユトラール。貴女に、託したいの」

「託す？」

正直、今世の母はあまり得意ではない。

好き嫌いの話ではなく、僕はこの人のことが苦手なんだ。

母が僕を見る目は、何処か狂気的だった。

僕を自身と重ねているような、届かない何かを幻視して焦がれているような、言つて
しまえばそんな感じか。

けど、やつぱりと言うべきか。

「貴女は私の理想。貴女は私の唯一無二。貴女は私の娘」

「ああ。僕は、貴女の娘だよ」

僕を見る目にそのような色があろうと、どうしても、母は母なのだ。

前世も今世も関係無い。

母の言葉には、母親としての愛情がいっぱいだった。

耳元に触れてから、母は僕の両手を握り込んで真っ直ぐな眼で見据えた。

「だから、勝つて」

「??勿論」

有無を言わさぬ響き。呪いじみた期待。

手のひらに握られたのは、四芒星型サザンクロスの耳飾り。

これがどういう意味か、分からぬほど鈍感ではない。

「私の代わりに??メジロに盾を。きっと、約束よ」

「ああ、きっと約束するよ、母さん」

「??そう。安心、した??わ」

そう言うと、母は目を閉じてそれっきり動かなくなつた。

まるで死んでしまつたかのように。ずるりと僕の手を握り締めていたその手が滑り落ちる。

聞こえてくる規則的な寝息が辛うじて生存を訴えているが、僕には分かつてしまつた。

——ウマ娘が死ぬ時は正しく今だ。

走るどころか、歩けなくなつてしまつたならば、ウマ娘はもう死んでしまつてゐる。だから、母は僕に託したのだ。
言わば、これは相続にして継承だ。

天皇賞に懸ける情熱も何もかも、そつくりそのままこの耳飾りに秘めて僕に託したのだ。

こんなに子供冥利に尽きることはない。

「母さん、見ていてくれ。僕は、誰よりも強く輝いてみせる」

それが、それこそが今世の母への最大の孝行だと確信している。天皇賞の盾なんて、一つと言わずいくらでも持つて帰ろう。

母のくれたこの身体は、その為に使い潰せる最高の肉体だ。

命尽きるその時まで、走り抜こうとも。

「また来るよ、母さん」

眠る母をベッドに横たわらせる。

これ以上無いほどに僕は燃えていた。消えることの無い熱意に突き動かされていた。

託された耳飾りを付けて病室を出れば外にはじいやと、おばあさま、そしてマツクイーンの姿。

僕は三人を一瞥すると、目礼をしてその場を後にするのであつた。



病室から出てきたシユトラールお姉さまを、わたくしは一瞬誰だか理解することが出来なかつた。

見た目は耳飾りしか変わつていない。

けれども、その身に纏う気迫は既にわたくしの知るシユトラールお姉さまではなかつた。

母親が倒れるという一大事、お姉さまに何と声を掛けたら良いのか。

そんなことを考えていたわたくしは置き去りにされてしまった。

「??彼女は至つた。マックイーンさん、アレが今メジロの最高傑作です」

おばあさまに言われなくとも分かります。

今、メジロの最高傑作と呼ばれるべきは、メジロマックイーンではない。メジロシユトラールなのだと。

わたくしの努力が足りないだなんて欠片も思いません。生まれてからこれまで、メジロのウマ娘足らんと人生を捧げてきました。

あの人の努力が、大器を並外れた努力だけで開花させてしまつたあの人人がおかしいのです。

認めることが出来ないのが、悔しい限りですが。

「良いですか、マックイーンさん。私は、シユトラールさんと同じくらい貴女にも期待し

ています。あの子と張り合えるステイヤーは、貴女しかいません」「分かつてあります」

まるで慰めのようにも取れるその文言。

ですが、おばあさまのその言葉を世辞と捉えることもまたわたくしには出来ない。

シユトラールお姉さんに届き得るステイヤーは同じ年代を探してもほとんど居らず、今のメジロにしても将来的にはという保険が付いた上でわたくししかいないのは百も承知。

それでも。

それでも、わたくしというウマ娘は本能の奥の奥で、お姉さんに負けたくないという剥き出しの渴望が燃えている。

絶対に追い付いて、追い越したいという意思が自分でも怖いくらいに煮え滾つている。

「??本当なら、同じメジロのウマ娘同士、それも盾を約束された者達で争い合うのは望まないのでですが、この際致し方ありません」

そう言うおばあさまの言葉からは、端々から無念さや諦観が滲み出していた。
しかし、わたくしには分かる。

おばあさまのその言葉は、きっと、

「マツクイーンさん、勝ちなさい。シュトラールさんにも同じことを言いますが、勝つのです。互いに全力を出し合った上で、勝ちなさい」

「はい??ツ！」

それはきっと、何処までも純粹な好奇心。

どちらも確実ならば、双方が競い合えばどうなるのかという興味だ。童心と言い換えてもいい。

おばあさまからは最も縁遠いような、そんな概念だ。

でも、わたくしが同じ立場ならわたくしだつてきつとその思いに駆られることでしょう。

——メジロシュトラールとメジロマツクイーン、果たしてどちらが強いのか、と。

待つていてください、シュトラールお姉さま。

絶対に振り向かせてみせます。

他の誰でもないわたくしという輝きを、その目に焼き付けて差し上げますわ。

第七話 あたしの王子様

小学校五年目もそろそろ終わりに近付き、長いようで短かつた二度目の小学校生活も最後の一年に入ろうとしていた頃。

僕は、日本ウマ娘トレーニングセンター学園の入学試験の為に記憶の洗い出しをする時間を撮るようになつた。

ついでに、おばあさまに言われてドーベルの勉強も見ているのだが、流石は名家の出身というだけあってかほとんど手は掛かっていない。

勿論、ノルマに加えた追加のトレーニングも欠かしていないのだが、ドーベルは自然と不参加が多くなつた。

代わりに、マツクイーンとライアンが参加するようになつたのだが、やはりと言ふべきかここでも名門の血。

まだまだ未発達の身体でも、年々ハードになりつつある僕のトレーニングに着いてきている辺り、目に見える才能というものが恐ろしい限りだ。

「シユトラールさーん！」

「やあ、ライアンちゃん。どうかしたのかい？」

「あー、えっと、そのお」

勉強の息抜きに芝のコースを走つていると、私服姿のライアンが駆け寄つてくる。
何やら用があるみたいだつたので走るのを止めて問い合わせれば、モジモジとしながら
恥しそうにするばかり。

ライアンは最近になつて、僕と会話する時によく口籠るようになつた。

こういう場合は大抵こちらからは何もせずに、話し始めるのを待つた方が良い。

そうしていると、やつと落ち着いたのかライアンはおずおずと言葉を紡ぎ始めた。

「あつと、あの、シユトラールさんは明日つて何か予定ありますか?」

「明日? 空いてるけど」

明日は土曜日だ。よつて学校は無い。あるとすれば勉強やトレーニングくらいだが、
可愛い姪??じゃなくてライアンからの頼みだ、空けて欲しいと言われば構わない。
だが、ライアンからこうして誘われるのは随分久しく感じた。

「あ、あの、それだつたら一緒にお出掛けしませんか??つ!?

「お出かけ? 良いよ、蹄鉄も買い換えたかつたし」

「??ほつ。分かりました! ありがとうございます!」

安心したような顔を見せたのも束の間、ライアンは嬉しそうな足取りで早足に立ち去つてしまつた。

唐突ながら、明日の予定を埋めてしまつた為、この後トレーニングでもしようかと頭を巡らせた時、今度は珍しい人が声を掛けてきた。

「ライアンも貴女も、隅に置けませんわね」

「アルダンさん??」

「もう。マックイーンみたいにアルダンお姉様って呼んでくれても良いではありますんか」

アルダンさん、そう呼ぶとその人物は悲しげに眉を歪めて訂正を促した。

お淑やかな雰囲気。マックイーンとはまた違つた、深窓の令嬢という表現が良く似合う人物。

二歳年上のウマ娘、メジロアルダン。その名の通り、メジロ家の一員だ。

もう既にトレセン学園に入学を果たしており、強豪揃いの中、生まれ持つた脚の脆さに屈せずに努力を続けている僕の尊敬する人もある。

そんな彼女は半月を目処に、脚の回復の為にメジロ家に帰つてきているのだ。
「それで、どうかしたんですか、アルダンさん」

「おばあさまがお呼びですよ」

「そうですか、分かりました。ありがとうございます」

「いえいえ。明日、楽しんできてくださいね」

それだけ言うと、アルダンは背を向けて去つていた。

おばあさまが用事か。いつたいなんだろうか。

トレーニングウェアから着替えて、考えながらおばあさまの部屋へ向かつて歩いていると、今度はドーベルが階段を上つてくるのと鉢合わせた。

「あら、シユトラール。貴女もおばあさまに呼ばれたの？」

「うん。ということは、ドーベルも？」

「ええ、アタシもよ」

ということは、僕とドーベルの二人に関係すること。

??十中八九、再来年に迫つたトレセン学園入学についての話だろう。こんな時期に何の話かはやはり分からぬが。

「そう言えば、ライアンから誘われた？」

「明日のことなら、確かに誘われたよ。でもどうして？」

「ライアンに私服について助言を求められたから、どうしてって聞いていたら、嬉しそうに貴女とお出掛けしたいんだって話してくれたわ」

「僕なんかと出かけるの何がそんなに楽しみなんだろう??」

そう言われても、ライアンが今までして僕と出かけたい理由が分からなかつた。

眞面目も眞面目にそう言うと、ドーベルは呆れたような仕草の後に嘆息して続ける。

「??あつきた。シュトラールってば、自己認識能力低過ぎじゃない？」

「??心外だな。僕はこれでも自分のことくらい分かつているさ」

「その答えが論外よ。良い？ ライアンはね、貴女に憧れてるの。??ま、まあそれはアタシもなんだけど??」

最後の方は声が小さくて聞き取れなかつたが、その言葉には異論を唱えたい。憧てる？ 僕のどこに憧れるのか。

強くもなければ、可愛くもない。僕みたいな奴の何処に憧れるような要素があるんだろうか。

「貴女の何処に憧れてるかなんて知らないけど、でも分かる。まあ、ライアンのあの感じ、アタシは流石に美化し過ぎだと思うけどね」

「そうに違いない。僕なんかに憧れたつて、何一つ良いことないよ」

「??それも流石に言い過ぎだと思うけど」

言い過ぎなものか。

ライアンは、僕よりも明らかに才能に恵まれている。体格だつて僕なんかより余つ程良い。僕に憧れる必要なんて皆無だ。人好きのする性格で愛嬌もある。

??あれ。僕が勝てる要素、努力以外に無くないか？

「シュトラール、あんまり自分のことを卑下しない方が良いと思う」

「??いや、これくらいが丁度良いんだよ」

「はあ、筋金入りね。まあ良いわ、早く行きましょ」

「あ、ちょっと。ドーベルから振つてきた話なのに」

無責任にも話を切り上げて先に行つてしまつたドーベルを追いかけて歩みを早める。
まあ、正直言つて僕としてもこういう話はどう返せば良いのか分からぬから助かつた。

でも、そんなことを言われたら、明日のお出かけは少しだけ考えないとね。
道すがら、僕は明日のプランを考え始めるのであつた。



翌日。約束した場所は近くにあるショッピングモール。

少し早く来すぎてしまつたあたしは、手持ち無沙汰気味にショッピングモールのベンチで今日のことを考えていた。

というか、流石に三十分前は楽しみにしがだらう、あたし。
尻尾が変な動きしそうなくらい、舞い上がつてしまつてゐる。
「あー、誘つちゃつたよお??迷惑じやなかつたかなあ」

メジロ・シユ・ト・ラールさん。あたしやマツクイーンの二つ歳上のお姉さんで、あたしの憧れの人。

普段から中性的なその人は物腰穏やかで紳士の鑑みたいな人なのに、社交の場でドレスを着させたら絵本の中のお姫様みたいで誰よりも似合う、ちょっと狡いくらいに完璧な人だ。

憧れるのも当然だなって思う。

今日はそんな人とお出かけ。

楽しみみなのは楽しみなんだけど、緊張するなっていう方が無理だ。

時計を見れば、約束の時間まで後二十分。

どうやつてそれまで時間を潰そうかと考えていると、ベンチに座つて俯くあたしに影が差した。

「やあ、早いね。待たせたかな?」

まさかの予定よりかなり早いシユ・ト・ラールさん本人の登場に、あたしは完全に舞い上がりつて顔を上げた。

そして、固まつた。

「い、いえ、シユ・ト・ラールさ??ん??」

「ん?」

??流石はシユトラールさんだ。

いつもは硬すぎないけどフォーマルな感じの私服なのに、今日はジー・パンや明るい色合いのシャツなどカジュアルに決めてきている。

元からスタイルも良くて、普段は後ろで一本に束ねている髪の毛も今日はアップで留めているのに、格好良さ、凛々しさが際立つていて凄い。カジュアルな装いが、シユトラールさんの持つマックイーンやアルダンさんのような天性の気品に調和されてもつと別の何かに変じていた。比喩無しに輝いて見える。

まるで、絵本の王子様みたいだ。

「??いや、僕は王子様なんて柄じゃないよ」

「へ？」

あ、あれ、もしかしてあたし、今の全部口にしてた？

そう視線で問い合わせると、返ってきたのは無情にも首肯。

茹で蛸のように顔が真っ赤になつて、熱が上がつていくのを自覚する。
??恥ずかし過ぎる。

「でも、ありがとうございます。そう思ってくれるなら、今日は君の王子様になろう」

「??は、はひ。よろしくお願ひします??」

今度は別の意味で顔が真っ赤になつてしまつた。

シユトラールさん、破壊力が高過ぎる??。考えていたプラン全部が今の衝撃で消えてしまった。

呆然とするあたしは手を引かれて歩き出す。まるで恋人のような距離感に、あたしの心臓は際限なく鼓動を早めた。

いつもは何処かでなりきれないあたしも、今日ばかりはお姫様気分を満喫するのであつた。

尚、この日は後にあたしの生涯の思い出の一つにして、黒歴史そのものとなるのはまた別の話である。

第八話 恐れの芽生え

『二年連続三冠ウマ娘誕生の瞬間まであと少しだ!』

残り二百メートル手前、実況に京都レース場が湧いた。

先頭を駆けるのは、前髪の三日月型のメッシュが特徴的なウマ娘。

シンボリルドフ。

基本的に競馬のケの字すら知らない僕が、珍しいことに前世から知っている二人のウマ娘の内の片割れ。

競馬好きの同僚が僕を競馬に誘ってきた時、よくこのシンボリルドフとその息子であるもう一頭の馬の話をしていたので、その二頭だけは何となく覚えていたのだ。

まさか、世界が違うとはいえ僕がその歴史的瞬間に立ち会えるとは思つてもみなかつたが。

『ゴールドロード、2着争いに加わった!』

残り二百メートルというところ、無敗の三冠ウマ娘を懸けて激走するシンボリルドフをもう一人のウマ娘が猛追する。

僕としては結末を知っているシンボリルドフのレースよりも、その彼女の方が目を

引いた。

無敗の三冠にリーチを掛けるシンボリルドフの道程を阻止せんと、今この瞬間もターフを駆けるそのウマ娘の胸中に、勝ちたいという思い以外は恐らく存在していないに違いない。

その情熱こそ、何よりも強く輝いている。

このままシンボリルドフを抜かしてしまいそうな気迫。運命を覆せるかもしれない輝き。

『シンボリが三冠ウマ娘達成！　シンボリルドフ！　彼女こそ、無敗の三冠ウマ娘です！』

だが、現実は非情だ。

僕がその結末を知っていたように。ウマ娘に課せられた別世界の存在の名と運命と馬いうしがらみは、厳然と立ち塞がる。

一着でゴールインしたシンボリルドフは、観客席の前で三本の指を立てた。

それに対しても、それを知る僕からしてみれば運命の前に敗北したとも言えるウマ娘達、特に二着のあの子は濁流のように涙を流していた。

これを絶望と呼ばずしてなんと呼ぶのか、僕は知らない。

努力さえも、運命に否定されているような気分にすらなる。

有り体に言つて、不快だつた。

まさか、前世の記憶から興味本位で訪れたレースでそんな事実に気がついてしまうとは思いもしなかつた。

けれども、結末を知つていながらこのレースを見届けた僕が、今、熱気に当たられて昂つているのもまた事実。

今はただ、皇帝シンボリルドルフの勝利を祝おう。

まあ、無理言つて連れてきてもらつた甲斐はあつた。

「流石は皇帝だね。あの走りは、まだまだ真似できそうにないよ」

「ですが、お嬢様なら必ずやあの場所にも辿り着けると、このじいや、確信しております」

「世辞は良いつて。未来がどうなるかは、全て今の僕次第だからね」

「?? 左様ですね。差し出がましいことを申しました。お忘れくださいませ」

そうは言つたけど、僕は少しだけ恐ろしくなつたんだ。

もしも僕にもまた、運命という名のしがらみが宿るというのなら、この努力は、この情熱は、全て無意味なモノに成り下がるというのか。

僕の、ドーベルの、マツクイーンの、ライアンの、アルダンさんの。みんなの輝きは、

決められた光り方でしかないというのか。

??。

じいやもそなうだが、メジロ家に仕える者達は必要以上に僕達メジロのウマ娘に対してもイシヨしてくるし、かと思えば信じられないくらい過保護だしで少し気疲れする。勿論、みんな良い人だから迷惑だなんて思うはずもないのだが。

うん。

おばあさまやお母さんにもそなうだが、僕を支えてくれているみんなの為にも盾は絶対に勝ち取りたい。

そう再認識出来たという点でも、今日という日に感謝しなくては。

運命なんて、知らなければどうということは無い。

さて。トレセン学園への入学も来年に迫っている。時間は無い。

帰つて早速トレーニングでもと思って踵を返し歩き始めたその時、視界の端に気に入る影を見つけた。

「わああ!!」

ウイニングサークルに立つシンボリルドフに熱心な視線を送る幼いウマ娘。

歳の頃はマックイーンやライアンと同じくらいか。もう少し幼くも見えるが、だいたいいそれくらいだろう。

一度目にとまると、頭から離れない。

僕はその少女に話し掛けてみることにした。

「君」

「?? お姉さん、誰?」

小首を傾げて問い合わせてくる少女は、どこまでも真っ直ぐな眼をしていた。まるで、奇跡だってその身一つで起こせると確信していそうな、そんな眼だ。

「僕はメジロシユトラール。君の名前は?」

「ぼくはトウカイティオーです!」

「つ」

力強く名乗った少女のその名を聞いた時、僕ははつと息を呑んだ。

これもまた、運命というわけか。

トウカイティオー。

その名は、僕が知るもう一つの名前。奇跡の馬。

何を話そうかなんて考えてなかつたが、彼女と対面して話すならこの話題以外にありはしないと直感した。

「シンボリルドルフさんは、凄いね」

「!! うん! 深い! ぼくも、シンボリルドルフさんみたいになるのが夢なんだ!」

「?? そうなんだね。ティオーちゃん、頑張つて。僕も応援してる」

「うん! ありがとう、お姉さん! ぼく、頑張る!」

僕は今、ちゃんと笑えているだろうか。ちゃんと、彼女を応援できているのだろうか。
その希望に満ち溢れた眩しい笑顔が、僕を抉る。

一部とはいえ結末を知る大罪を抱えた僕を責め立てるようだつた。
好奇心、興味とは恐ろしいものだ。時に、気が付くべきでなかつたことさえ突き付け
てくる。

踏んだり蹴つたりな一日だ。

だけど、それと同じくらい焚き付けられた忘れ難い日だつた。

この情熱は嘘じやないつて、僕が証明してやる。

絶対に思い通りになんてさせやしない。僕の道は、僕が決める。

運命なんて、糞喰らえだ。



「じいやさん、僕達つて何のために走るのかな」

夕日が照らす京都からの帰り道。

助手席に座るシユトラールお嬢様は、静かに私めに問われました。
「? 私には分かりかねますが、一つだけ言えることがあるとするならば、それは勝ちたい

「という本能ゆえかと。大奥様の受け売りですが」

ウマ娘史に残るであろう本日の菊花賞、シンボリルドルフ様の走りを見て何かを感じられたのだと思った私はそう答えた。

きっと、これこそが求められていた答えだろうと、そう確信していたのです。

お嬢様もまた、その例に漏れないと思つていた。

けれども、隣に座つて俯くお嬢様の顔は、

「?? そう、だね。きっと、そうに違ひない?? はずなんだ」

直視するのに堪えない程、悲痛な面持ちをしておられた。

普段から、余裕のある態度を崩さないお嬢様の意外過ぎるその表情に、私は我が目を疑うことしかできなかつた。

「お嬢様??」

「あ、ごめん、じいやさん。変なこと聞いたね、忘れてくれ」

「?? 分かりました」

先程までの重く沈鬱な表情が嘘だつたかのように、お嬢様は普段通りの明るさを見せました。

しかし。

私は、瞬きの間に見せたお嬢様の絶望し切ったような顔を忘ることはできないで
しよう。

何に絶望なされたのかも、どうすればその絶望を取り払つて差し上げられるのかも、
何一つ分からぬことが歯痒くて仕方がない。

支えることしか出来ない従者とは、なんとも情けないものです。

「じいやさん、僕は絶対に勝つよ。勝つて、メジロに盾を持ち帰る」

「ええ、お嬢様なら必ずや」

マックイーンお嬢様、ライアンお嬢様、ドーベルお嬢様。

願わくば、そのお力でシユトラールお嬢様をお救いください。

「さあ、じいやさん。帰つたら入学に向けて頑張ろう!」

「はい、お嬢様。その意氣でござります」

??どうか。

運命よ、お嬢様をお導きください。

トレセン学園編

第九話 入学

「最後になるが、諸君らにはこのトレセン学園にて枕戈待旦、悔いの無い日々を送つてほしい。それが、先達としてこの私が望む全てである。以上だ」威厳に満ちた声がそう締めくくると、学生による挨拶に対してのものとしては過剰にも思える割れんばかりの盛大な拍手が講堂に響いた。

しかし、それもそのはずだ。

壇の上に立つのはいつかの皇帝ウマ娘、シンボリルドルフ。

無敗の三冠ウマ娘にして、トレセン学園の生徒会長である彼女は今や生ける伝説となつた存在なのだから。

そんな彼女に憧れてトレセン学園に入学する生徒もそれなりにいるのだとか。

まあ確かにあの走りは凄かつたが、憧れてどうするんだと思わなくもない。そんなことと言えようはずもないが。

それでも、少なくとも憧れるだけの子に負けるつもりも無し。

今日は待ちに待つたトレセン学園の入学式。

軽く辺りを見回せば、たくさんのウマ娘達が居る。絶対数の少ないウマ娘が一箇所にこんなに集まる様はいつそ壯觀である。

これだけの数のウマ娘だ。当然、中にはひと目で分かるくらい才気に溢れた子達が沢山いる。

スラリとしなやかな肢体が目を惹く橙色の髪の子や、大人しそうだが油断ならない雰囲気を放つ小柄な子、目付きが悪く不良みたいだが芯の強そうな子。他にも点々と、好敵手となりそうな子達の姿。

やはりというか、これは一筋縄ではいかないだろう。

ここに立つ誰ひとりにも負けられない。

立ち塞がる運命だつて??。

「どうしたの？ キヨロキヨロして」

「え、そんなに分かりやすかつた？」

「ええ、アタシにはね。??付き合いはこここの誰より長いし」

来る戦いを予期して、決意を新たにしているとドーベルが話し掛けてくる。

いつの間に式が終わつたのか、周囲は解散ムード。

周りと同じようあぶれないよう他の子と親睦を深めようとか、そんな気にはならなかつた僕はドーベルと共に講堂を離れることにした。

「やっぱり国内最大級なだけあって、強そうな子はそれなりにいるね」

「そうね。それに、先輩達も強敵揃いよ」
「違いない。僕達も負けていられないね」

皇帝シンボリルドルフはもちろんのこと、見た限りでは、アイシャドウが目立つ氣難しそうな副会長や、一匹狼みたいな雰囲気の生徒会役員もかなりやりそうだつた。

同期以外にも、立ち塞がる壁はあまりに大きい。

「そう言えば、チームは何処にするか決めた?」

「ああ、いや、特にはまだ考えてないな」

チームとは、このトレセン学園においてウマ娘が所属する団体のことだ。一人、または複数のトレーナーとウマ娘達によつて構成される。

レースに出るなら、チームへの参加、担当トレーナーの存在は必須条件。

僕も追々何処かに参加せねばならないが、今すぐに決める必要も無いだろうというのが正直な考えだつた。

どうしようかとうつすら考えていると、ドーベルが言いにくそうに煮え切らないまま切り出した。

「??それなら、さ。シユトラールさえ良ければなんだけど、同じチームにしない??」「ドーベルと?まあ、僕は良いけど」

「そう、なら良かつた。決まつたら教えてね」

実際、メジロ家としてはメジロのウマ娘同士で競い合うのはあまり宜しくない。

まあ、時と場合によつては話が別だし、僕自身いつかはドーベルと競い合いたいとも思つてゐるので、本当にどちらでも構わないのだが。

その後は他愛も無い話をしながら寮に向かつて歩いていると、分かれ道でドーベルが立ち止まつた。

「じゃあ、アタシは美浦寮だから」

「あ、そうか。僕は栗東寮だから明日からはここで別れることになるんだね」

そう、僕は栗東寮に割り当てられ、ドーベルは美浦寮に割り当てられたのだ。だから、一緒の下校はここまでとなる。

二人部屋らしいので、同室相手のこともあるだろうし、これからは今までのように頻繁に顔を合わせるということは無くなるだろうが、僕やドーベルもそれを気にするようなタイプではないから問題無し。

寮生活なんて前世今世含め人生で一度も経験したことは無いので、本音を言えば個人的には少し楽しみなくらいである。

それに、聞いた話によれば寮対抗でのイベントや模擬レースなどもあるらしいので、僕とドーベルが離れたのは悪くないと思つてゐる。同じチームに入るならなおのこと。

「ええ。お互い、頑張りましょ」

「ああ。お互いに、ね」

分かれ道、手を振つて別れると栗東寮の方へ向けて歩き出す。

辺りを歩く生徒は疎らだが、上級生はまだ授業中のはずなので彼女らは全員同期か。
そう言えば、先に寮長のところに行かなければならぬのだつたか。部屋の鍵を貰わ
なければならぬのだ。

僕と相部屋の子と、どちらが先に部屋に着くか分からぬが、たとえ相部屋の子が鍵
を先に受け取つていたとしても顔出しはするべきだろう。

それにもしても、やはりと言うべきか女子の交友関係構築能力は高い。

辺りの生徒は疎らとは言つたが、みんなそれぞれ早速作つた友人と一緒で、一人で歩
いているのは僕くらいだ。

??これは、早急に一人二人、話せる人を見つけるべきだろうか。誰か居ると良いのだ
が。

そう思つて辺りを見回すと、幸いなことに一人だけ誰とも一緒ではない黒鹿毛、黒髪
の小柄なウマ娘が居た。

流石にいきなり話し掛けるのは難易度が高いが??。

けれど、なんとなく、そうなんとなくだけど、その背中が小柄な体躯以上に小さく、寂

しそうに見えたから。

気が付けば、僕は彼女に声を掛けていた。

「やあ、君。新入生の子だよね？」

「?? そうですけど、あなたは？ 私に何か用ですか？」

「あ、いや、用つていう程じやないけど」

「用がないなら、もう行きますね」

あー、こういうタイプか。

刺々しいというか、周りを寄せつけないというか。どうやら彼女は人付き合いが得意ではなさそうだ。僕も人のことは言えないけど。突き放すような言動に折れることなく、会話を続ける。きっと彼女も緊張しているだけなんだろう、そうだと信じて。

「あ、ちょっと」

「？ なんなんですか、この私の時間を無駄にしないでくれますか？ 私は凄いウマ娘なので」

前言撤回。

この子は言動がキツくて友達が居ないタイプだ。

典型的な自分に自信があつて、周りを見下す程ではないがそれでも眼中には無い類。

??話し掛ける相手間違えたかな。いや、絶対に間違えたな。

「あ、今この私のこと、友達が少なそうって思いましたよね？ 失礼な人ですね、いきなり話しかけてきておいて何様ですか」

「ごめん、ごめん、そんなこと思ってないよ。ただ、僕もあぶれちゃってね」

「僕もつてことは、やっぱり私のこと友達がいないつて判断しましたよね？ そんなことありませんから、勝手に誤解しないでもらえますか？」

「違うって、本当に」

「もう良いです。私の素晴らしさがわからない人なんて知りません」

??ああ、これは面倒だ。

辟易としていると、彼女は怒ったままずかずかと一人寮の方へと歩いていつてしまつた。

同期との初コンタクトがこれとは、とてつもなく前途多難である。

僕は、ため息ひとつ、肩を落としてまた歩き出した。



「はあ??」

ベッドに座ると、割り当てられた部屋の中にはスプリングの軋む音が響いた。
 私の活躍の第一歩、トレセン学園のとても大切な初日。私の気分は決して良くはなかつた。

「もう、信じられません。なんなんですか、あの失礼な人は」

私が思い出すのは、先程寮への道で話し掛けてきた白マフラーの鹿毛のウマ娘。お姫様と王子様、どちらの雰囲気も併せ持つた不思議な人。

確かに、綺麗な人だったのは認めます。認めますけど、初対面の私のことを友達が居ないだなんて、そんな風に思うとはいつたいどのような教育を受けてきたのでしょうか。

この、才氣溢れる未来の超強強ウマ娘であるこの私に友達が居ないだなんて、そんなはず、そんなはずは??。

「??はある

??無いとは、言えません。言えませんけど、今までにも一人二人はいましたし、友達なんてきつとこれからたくさん。

そう、例えば同室の子とか。

そうです。きっと同室の子は私の素晴らしいを認めてくれる、私と同じくらい??は望み過ぎでも私の次に強いウマ娘のはず。しかも、友達がもう既に沢山いて、私にも紹介

してくれるようなそんな子に違いない。

早く来ないですかね、私の親友となるウマ娘。

来たるまだ見ぬ親友になる予定のウマ娘に期待で胸を膨らませていると、噂をすればなんとやら。

コンコンと控えめな、それでいてしつかりとしたノックの音が鳴つた。
「失礼するよ」

「どうぞ」

そして、入ってきたのは、

「僕はメジロシユトラール、よろしく??く??」

「私はキンイロリヨテイです、よろしくお願ひします??ね??」

??え。

「あ」

入ってきたのは、あの時の失礼な白マフラーのウマ娘でした。

彼女も全くもって予想外だったとでも言うかのような表情で固まっています。かくいう私も、驚きと諦観と失望で動くことが出来ずにいました。

でも、彼女がこの部屋に来る理由なんてひとつしかない。
もしも彼女が待ち侘びた同室相手なのだとするならば。

呪いますよ、運命。

我が華々しい黄金の旅程の前に立ち塞がる前途多難な運命に、私は早速悪態をつくの
でした。

第十話 出会い

「それではAクラスの皆さん、今年一年よろしくお願ひします」
教壇に立つ担任の自己紹介が終わるとほぼ同時、ホームルーム終了のチャイムが鳴つた。

入学式の翌日である今日は授業こそ無いものの、此処トレセン学園における生活の粗方の説明や、顔合わせ程度の自己紹介などがあつた。

僕達Aクラスは新入生、または人間で言う中学一年生に相当する。

ひとつ上の世代であるBクラスには知り合いはないが、クラシック参加が可能となるCクラスにはアルダンがいる。

「おい、お前」

それにしても、このクラス、この世代は強豪揃いのように思える。

ドーベルは言わずもがな、他者を寄せつけない物静かな雰囲気のウマ娘サイレンススマカや、大人しそうながらも強い意志を感じる眼のウマ娘サンディブライアン、典型的な不良やスケバンみたが勢いは強そうなウマ娘シルクライトネス、ちょっと様子がおかしいが侮れなさそうなウマ娘マチカネフクキタルは要注意であろう。

後、昨日一悶着あつた僕のルームメイトであるウマ娘キンイロリヨテイも、このメンツに引けを取らない才気を感じる。

しかし、キンイロリヨテイは少しばかり自尊心が高過ぎる。まともに会話できるだけマシと言えるかもしれないが、それはそれとして、これから先ずっと彼女と同じ部屋だと思うと今から気苦労が絶えない。

「おい、何無視してんだよ」

「?? ああ、シルクライトネスさんか。どうかしたのかな?」

そこで、僕はやつと話し掛けられていることに気がついた。

机の前で僕を睨みつけながら仁王立ちするのは、上述した不良っぽいウマ娘シルクライトネス。不機嫌そうなオーラはデフォルトなのか、それとも僕に何らかの不快感を抱いているのか。??前者だと良いが。

「どうかしたも何も無い。お前、あのメジロか?」

「??ああ。君が考えているメジロが、僕の思い浮かべているそれと同じならば、ね」

あのメジロ、というのが何を指しているのか分からないほど僕は鈍感ではない。

恐らく、彼女はメジロ家である僕に対抗心のようなものを抱いているのだろう。不快感でなくて良かつたが、それはそれで少し面倒だ。

「どうかしたも何も無い。お前、あのメジロか?」

「はつ、回りくどい言い方しなくて良い。お前があのメジロつて分かつただけで十分だ。あたしと勝負しろ」

「勝負?」

「ああ。次の選抜レースであたしと勝負しろ」

選抜レースとは、毎年四回行われるその名の通りウマ娘達を選抜するレースのことだ。

毎度将来有望な原石を見つけるべく大勢のトレーナーが観戦しに訪れ、ウマ娘はここで勝つ、ないしここで実力や将来性を見せることでトレーナーからスカウトされるというわけだ。まあ、説明を受けただけなので、実際の空気感は掴みかねているが。

トウインクル・シリーズでの活躍を目指す上では、この選抜レースでの自らの売り込みは必要不可欠。

僕も、今年最初のレースから参加していこうとは考えていた。幸いなことに、これまでの幼少期からの努力は僕をある程度早熟の域にまで押し上げてくれている。たとえ上級生と戦うことになつても抜かりはない。

しかし、その一発目で勝負とはなかなか思い切ったことを。

それだけ、自分の走りに自信があるということか。

「??分かつた。やろう」

「はっ、そうこなくっちゃな。逃げんなよ」

そう言捨てて、シルクライトネスは立ち去つて行つた。

それと入れ替わりになるようにして、今度は少し離れた席に座つていたドーベルが歩いてくる。が、

「大変ね、シユ「貴女も面倒そうな人に目を付けられましたね」??ちょっと貴女、割り込まないでくれる?」

ドーベルが何事かを口にしようとしたそこに、件の同室相手キンイロリヨテイが割り込んできた。

不機嫌そうに眉を顰めるドーベルを無視して、キンイロリヨテイは続けた。

??というか、面倒そういう面ではキンイロリヨテイも人のことは言えないと思うのだが。

「ですが、この私、キンイロリヨテイは強くて優しいので、貴女のトレーニングに付き合つてあげても良いですよ?」

「??シユトラールのトレーニング相手なら、同じメジロのアタシだけで十分だから」

「あれ、貴女はメジロドーベルさんですね? 貴女もどうしてもと言うなら、私のトレーニングに付き合させてあげても良いですが」

これは、また??。

ドーベルのクールな面立ちに反して、犬のように感情表現豊かな尻尾が静かな怒りを表すかのようにびんと真っ直ぐになつてゐる。キンイロリヨテイはと言えばそれを知つてゐるのかいなか、その我の強さを遺憾無く發揮していた。

この空間が面倒臭くなりそうな予兆を感じ取つた僕は、二人に見つからないようにそそくさとその場を後にするのであつた。

□

「よつこいせつと」

先輩がおっさんじみた掛け声で荷物が詰まつたダンボールをトレーナー室の床に下ろす。

これで荷物は粗方運び込めたはずだ。

「取り敢えずこんなもんか」

「ありがとうございます、先輩」

「良いいって良いつて、俺も暇だつたし」

無精髭の生えた顎を摩りながら、先輩は朗らかに笑つた。

普段のだらしなささえ見せなければ、先輩もそこそこモテそうなのに勿体ない。東条

先輩も大変だなあ。

心の中でもう一人の先輩に合掌していると、不意に先輩が真面目な顔で見詰めてきた。

「麻美ちゃん、頑張れよ。チーム組むんだつたら、五人は揃えなきやだからな」

「はい」

麻美、というのは私こと、あさみいっか麻美一叶のことだ。

元々新米トレーナーであつた私は、他のトレーナーが運営するチームにサブトレーナーとして所属し、下積み時代を送っていた。

だが、晴れてチーフトレーナーと秋川理事長より太鼓判を頂いた私は、兼ねてより夢であつた自分のチームを持つことになつたのである。

今日は念願の私のチームの部屋への引越しである。

「じゃあ、俺はもう行くわ。今日こそゴルシにまともなトレーニングさせなきやいけねえしな」

「あー、あはは。頑張つてください、先輩。今日はありがとうございました」

「おう」

背中越しに手を振る先輩を見送ると、私は前の部屋に残してきた書類を取りに戻ろうと踵を返して歩き始めた。

しかし、五人か。一人だけでも見つかるか分からぬのに、五人ともなると気が遠くなるばかりだ。

「うう??。次の選抜レースで、私なんかに担当させてくれる良い子が見つかつたら良いんだけど??」

やつぱり、自分の人生が懸かっていると言つても過言ではないウマ娘からすれば、自らに合つたトレーナーであるというのはもちろんのこと、実績のあるトレーナーに担当してもらいたいと思うものだ。

前のチーム、チームシリウスのチーフトレーナーであつた北原トレーナーも地方から來たとは思えない程の情熱的なトレーナーで、オグリキヤップと一緒にクラシック路線をひた走つてゐる。カサマツ時代からオグリキヤップを支えてきた彼に師事したいウマ娘はシリウスに沢山いた。

私にもそれだけの強みがあればと、そう思うのだが??。

こんな私みたいな新米に担当させてくれるウマ娘なんているのかどうか。
はあ??。

「??さてと、今年の新入生のデータチェック始めないと！ 落ち込んでる暇なんて無い！」

そうだ。まだまだ始まつたばかり。落ち込んでいるくらいなら、情報収集に手を付け

た方が良い。それに今年は、あのメジロ家から二人も新入生がいるのだ。

そんなお嬢様達が私なんかのチームに入ってくれるとは思えないが、それでもやるだけやつてみないことには何も始まらない。

なんとか調子を上げようと己を鼓舞し、足早にシリウスの部屋へと向かう。

「きやつ!」

「つ」

「痛たた??」

が、何処か浮ついていた私は、曲がり角で誰かと衝突して尻もちをついてしまった。まだまだ若いはずだが、打ちどころが悪かつたのかすぐには一人で立ち上がりたくないらしい痛い。

「ごめんなさい。あの、大丈夫ですか?」

腰を摩つていると、心配そうな声と共に手が差し伸べられた。

恐らく、こここの生徒だろう。こちらの不注意だつたのに、心配させてしまうなんて申し訳ない。

「え、こつちこそごめん。注意不足だつた??よ??」

手を借りてなんとか立ち上ると、初めてぶつかつた生徒の全貌が見えた。

そして私はあまりの衝撃に固まつた。

「??」

学園内なのに白いマフラーを巻いていることとか、普段なら氣になるであろう特徴なのに、今はそんなこと至極どうでもよかつた。

私は、その身体付きにひと目で魅了されてしまったのだ。

「すぐ??」

スラリとして均整のとれた手足、黄金比のような抜群のプロポーション、重心が安定していて欠片も乱れていない立ち姿、コンディイションを表すかのように艶やかな毛並み。

そのどれを取つても、一級品。

それなのに、まだまだ若く成長の余地があると來た。正しく垢抜けたという言葉が相応しい逸材である。

けれど、これだけの逸材がこの学園に居たら絶対に目立つし、他のトレーナー達も噂するはず。名前を聞けば分かるか。

「あの」

「あ、ごめんね！　で、君、名前は!?」

どうしても気になつた私が捲し立てるようにその名を問うと、彼女は戸惑いながら口を開く。

そして、二度目の驚愕に私はまたも固まることとなる。

「——僕は、シユトラール。メジロシユトラールです」
「メジロ、シユトラール??」

メジロシユトラール、トレーナー仲間から噂程度に聞いたことがある。何でも、名門メジロ家の秘蔵つ子にして、数多の優秀なステイヤーを輩出してきたメジロ家の歴史の中でも類稀な稀代のステイヤー。

あまりの衝撃の中、私は悟った。

私はこの日、運命の出会いを果たしたのだ、と。

第十一話 微熱

「はつ、はつ、はつ??」

1600メートル、まだまだ余裕はある。

ほとんど減速することなくコーナーを曲がり、段々と加速していく。チラリと横目で脇を伺えば、トレーニングに付き合ってくれているドーベルの他にも制服姿ではない人集りが出来ていて見えた。

今日も来てるのか、辟易とする気持ちを振り払い、正面を見据える。

「はあつ!!」

まだ余裕だ。

残り200メートル付近に差し掛かって、溜めていた分全てを解放するつもりでターゲットを踏み込んだ。

僕が力を最大限発揮できるという意味での適正距離は芝、2500から上。完全にステイヤー向きの脚質だから、今回の距離2000メートルは正直言つて余裕だ。今の僕なら、普通に走れば何周分も余力を残した上で完走できる。けど、僕はできる限り余力を残さないように加速した。

「おおっ!!」

見物客のどよめきが聞こえた。

この程度でも驚かせることができるなら、僕の脚もまだまだ捨てたものでは無いらしい。

昔から、僕の走りには切れ味がない。

最高速が他のウマ娘のそれよりもかなり劣るのだ。

だから、ほんのわずかでも速度を上げるために、後先考えない加速をしなければならない。幸いなことに、僕には2500メートルを走つてもそれが出来るだけの余力がある。

それに今日は少しいつもより調子が良い。自己ベストを更新出来そうだ。

おばあさまや主治医からは脚に悪いからあまりやらないようになると言われているが、こうでもしなければ僕が同年代のウマ娘達に追いつく事は出来やしない。

「??ツ!!」

ゴール板を駆け抜けて、ドーベルに視線を向ける。

今回はまあまあ良いタイムが出せたと思うのだが。

「2分1秒6!!」

「おお!!」

「新入生でこれだけのタイムが出せるなんて！」

2分1秒、小学生時代の1800メートルのタイムだ。

今、2000メートルでそれだけ走れるなら、僕もこれから先それなりにやれるだろう。

??けど、これ以上2000メートルのタイムを劇的に縮められる気はしないな。恐らく、これから先も。

最近、直感的に分かることが増えてきたように思う。

何が分かるかと言えば、それは自分の成長の限界だ。

特に2500メートル未満の距離のタイムはそれぞれこれ以上の成長が見込めないようを感じる。

逆に、それより上、2500メートル以上の距離は僕に限界なんてものはないんじやないかつくくらい、まだまだ発展途上だ。

おばあさま曰く、今の僕は半分本格化した状態であり、いつ完全になり、いつ衰えるか分からぬ不安定な状態らしい。

そもそもこれも、幼い頃からの過度なトレーニングが原因だろうと言われたが、僕としてはそれでも止めるつもりは無い。

「メジロショットラール！ 私と一緒に三冠、いや、あの皇帝を超えましょう！」

我先にと駆け寄ってきたトレーナーが、聞こえの良い願望を並べ立てる。

三冠か。確かに、狙えるなら狙いたい。

だけど、僕は別に皇帝を超えたいたくはない。悔いのない人生を送りたいだけだ。そのための障害となるなら、超えるまでのこと。ダメだな。

「メジロシユトラール、俺と一緒に盾を取ろう！」春秋制霸だ！

暑苦しい雰囲気の男性トレーナーが捲し立てるようにならうが、おばあさまとお母さん、メジロ家に仕えるみんなの為に天皇賞春秋制覇は確定事項だ。言われるまでもない。

その程度じゃ、僕は靡かない。

「私と！」「俺と！」「僕と！」

??面倒臭い。

誰も彼もが、自分のことばかりだ。スカウトされるのは光榮だが、もう少し核心を突くような、そんなトレーナーはいないものか。

僕は、僕のやりたいようにやりたい。それを誠心誠意サポートしてくれるような、そんなトレーナーが良い。高望みし過ぎかもしれないが。

けれども、誰かに道を委ねるのは無理だ。

「今度の選抜レース、そこでもう一度僕の走りを見てから、それでもという方だけスカウトしに来てください。それでは」

「あ、ちょっとシユトラール?!」

ドーベルの手を引いて、グラウンドを後にする。

正直、そこへいたつて気が滅入るだけだ。

「流石にあれじやあ、僕は誰も選べないな」

「ええ、アタシも」

そう言えば、一昨日ぶつかつたあの人もトレーナーバッジを付けていた。

あの時はピンと来なかつたけど、でも何処か他と違う情熱のようなものは感じられた。今日集まつていたあの人達とは少し違うようと思えた。

もしも、今度の選抜レースに来てくれたら、あの人と少し話してみたい。

着替えようと更衣室に向かう途中、ふと気になつてグラウンドの方を見る。

「あれは?」

「たしか、あの子はサンデイブライアンだつたかしら。一人で練習してゐみたいね」

一人、グラウンドを走る小柄な影。

クラスメイトのサンデイブライアンだ。

話し掛けるのも憚られたが、その時、僕の脳裏にある事実が過ぎつた。

??僕は、未だに一人も普通の子と友達になることは疎か話せてすらない。

このままでは、不良ウマ娘と自尊心の塊ウマ娘に目を付けられた、癖ウマ娘マグネットになってしまいます。

これを機に、何とか普通の子とも仲を深めておきたい。

「君、サンディブライアンだよね？」

「?? あ、はい、そうですけど?? つて、メジロシュトラールさんにメジロドーベルさん!?」
話し掛けると、落ち着き払った様子から一転、サンディブライアンが驚きの声を上げた。

そう言えば、ドーベルも初対面の他の子からはこんな風に驚かれたらしい。

そんなにメジロのネームが大きいものだと正直思つていなかつたが、僕まで彼女にこんな対応をされるということは僕の想像以上に名門メジロという立場は大きなものなのだろう。

こういう時、前世でもう少し同僚の言葉に耳を傾けておけば良かつたと切に思う。せめて、メジロ家の一人くらい知つてる名前が居れば??。後悔先に立たずだが。

「トレーニングの邪魔しちやつてごめんね」

「全然！ 私ももうそろそろ終わりにしようと思つていたから！ 二人もトレーニング終わりなの？」

「ええ。良かつたら、一緒に更衣室に行かない？」

「うん、私で良ければ」

明るくて気立てが良く、誘つても二つ返事で快諾してくれる辺り、同室のウマ娘とはもう既に桁違いに話しやすい。

ボトルとタオルを取つてきたサンデイブライアンも加えて、僕達は更衣室へと向かうこととした。

「あの、シユトラールちゃんとドーベルちゃんって呼んでも良いかな？」

「うん、構わないよ」

「ええ、アタシも」

「ありがとう！ 私のことはサニーって呼んで！」

サンデイブライアン、サニーは嬉しそうにはにかんだ。

初めは大人しそうだと思ったが、明るくてとても良い子だ。同室相手とチエンジして欲しい。

??これでも元男としては、ちゃん付けは勘弁して欲しいけど。

「サニーは今度の選抜レース出るの？」

「ううん、私はまだまだトレーニングが足りないし、出るつもりは無いかな。早くても、次くらいになると思う」

まあ、僕やシルクライトネスが早いだけで、普通はサニーみたいに二回目の選抜レースからの参加が妥当だろう。やつぱり、サニーは明るくて人当たりが良い子だけど、冷静に事を運べる侮り難いだ。

一番警戒すべきはサニーかもしれない。

「ん？ シュトラールちゃん、どうかしたの？」

「ううん、選抜レースどうしようかなってね」

「あー、でも、シュトラールちゃんなら、シルクライトネスさんにも勝てるよ！ だって、あのメジロのウマ娘だし！」

純粹な尊敬の眼差しが痛い。

けど、そこまで言われたら頑張るしかないな。

選抜レースまで残り二週間。

サニーからの期待に応えられるように、もつと頑張ろうと僕は決意するのであつた。

□

「シュトラールちゃんに、ドーベルちゃんかあ」

やつぱり、間近で見た二人は輝いてたなあ。

私なんか比べられないくらい、強くて、格好良くて、可愛い。
それに比べて、私は全然ダメ。こんな感じや、クラシックで活躍なんて夢のまた夢だ。
でも、願わくば。

「??なりたいなあ」

私も、あんな二人の隣に立てるようなウマ娘になりたい。

シユトラールちゃんと、ドーベルちゃん。

絶対にあの二人に追いつこうと、追い付いて二人からライバルだつて認められるよう
なウマ娘になろうと、密かに私は誓った。

第十一話 選抜レース

『さあ、今年も新入生達の初お披露目の時期がやつて参りました』
たくさんのウマ娘と、学園関係者やそうでない外部からのファンなど観客で賑わうグラウンド。

実況の声がグラウンドに響き、観客の期待を煽る。

入学式から二週間と少し。今日は選抜レースの日だ。

周りを見れば、ほとんど上級生しか居らず、時折入学式で見かけた顔をちらほらと。
トレーニングウェア姿のウマ娘達に交じつて、僕も準備運動をしていると、いつかの
ウマ娘シルクライトネスが僕を睨み付けながら歩いてきた。

「よお、メジロシユトラール。逃げずに来たな」

「元々参加するつもりだったからね」

「??ちつ、そうかよ」

え。なんで舌打ちされたんだ?

不機嫌そうな雰囲気を隠そともせず、シルクライトネスは睡でも吐き捨てそうな後
ろ姿で去つていった。

やつぱり、ガラが悪い。

「シユトラールちゃん！ 頑張つて！」

「流石にアレに負けるのだけはやめてね？ しかも、アタシにも飛び火しそうだし」

応援してくれるサニーと、あと多分応援してくれているドーベルに手を振りながら歩み寄る。

応援してくれる人が居ると、居らずに完全アウエーとではやはり前者の方が良い。

「まあ、僕の進退も懸かっているからね。本気で走るよ」

「そうね。それに、そうじやないとああいうタイプはいつまでも突つかかってくるだろうし」

「あー、シルクライトネスさんはかなり気性が荒いからね」

あの雰囲気だと、レースの最中にも妨害を仕掛けてきそうだ。

流石にそれは無いとそう思いたいが、メジロという名前に並々ならぬ敵愾心を抱いているみたいだし、今回のレースで勝っても終わらなそうな気がする。
どうしたものか。

『それでは、芝1800メートル、第一レースに参加する生徒は所定の位置にお集まりください』

アナウンスが促す第一レース。

その声に惹かれてグラウンドの方を見遣る。

僕は第二レースに参加する予定だが、この第一レースにはあのウマ娘がいる。このレースは少しだけ興味がある。

当のウマ娘は簡単に見つけられた。というより、気づいて欲しそうにこちらを見ていたので仕方なく目を合わせてやると、彼女は満足げに頷いて観客席を見渡す。

「皆さん、申し訳ありませんが、この私キンイロリヨテイが勝ちます。先輩であつても例外はありません、どうぞよろしく」

そう言つて、パドツクでやるように観客の目の前でジャージの上を脱ぎ捨てた僕の同室相手、キンイロリヨテイは誇らしげに体躯に見合はず大きめな胸を張つた。

??確かに、普段の傲岸不遜な態度の裏付けとしてはこれ以上無いくらい見事なプロポーションだ。これをトレーナーの手を借りずに一人で作り上げたのだとしたら、相当である。

周りの先輩方は彼女に苛立ちを多分に含んだ視線を向けているが、あるいはそんな先

輩方を抜き去つてキンイロリヨテイが勝つかもしれないと僕は思つていた。

『それでは、位置について』

それぞれウマ娘達が並ぶ。

キンイロリヨテイは大外の十二番、脚質は知らないが余裕の様子を崩そそうとしないあたり、差しや追い込みに適性があるのかも知れない。

『スタートッ！』

「「つ！」」

その掛け声に、弾かれるようにして十二人のウマ娘が駆け出した。

二人が開始直後から逃げ、競り合う中、先行策の五人が好位争い、様子を窺う差し組の中でキンイロリヨテイは悠々と最後尾を走つている。追い込み、という程の力の抜き様ではないが差しにしてはかなり緩く走つていた。

「キンイロリヨテイさんは、大分冷静に走るんだね」

「そうね、普段はあんな感じなのに」

レースは結構なスローペースで進み、キンイロリヨテイは全く動く様子も無く。

しかし、第三コーナーに差し掛かつたところで、展開が動いた。

『おおつと!? 十二番キンイロリヨテイが動いた！ 凄い足でカーブを外から回つてい

く！』

「??へえ」

カーブは、内側になればなるほど減速せねばならず、必然的に逃げや先行のウマ娘は失速する。差しのウマ娘はそこから先が勝負どころとなる場合が多い。

キンイロリヨテイもその例に漏れず、第三コーナーから仕掛けてくると踏んでいたが、まさかここまでとは。

加速が、上級生の中でも群を抜いている。

『凄い凄い！　凄まじい末脚が炸裂している！』

もう今の時点でかなりの速度を出しているが、当のキンイロリヨテイにはまだ余裕がありそうだ。

粘つっていた逃げの上級生を追い越して、一人抜け出してさらに加速していく。

『上級生を歯牙にもかけないごぼう抜きを見せ、キンイロリヨテイ、今二バ身差でゴール!!』

そのままキンイロリヨテイは一着でゴール板を駆け抜けた。

キンイロリヨテイのあの自信は、なにも過剰であつたわけではないらしい。それを証明するかの如く、圧倒的な試合運びであつた。

「??結構やるわね」

「ああ。これは、間違いなく立ち塞がつてくるだろうね」

ドーベルが感嘆するのも無理は無い。僕も勝つかもしれないとは思っていたが、まさかこれほどまでは思つてもみなかつた。

ドーベルが進む予定のティアラ路線にはきつと出てこないだらう。

恐らく、彼女が狙うのは僕と同じくクラシック三冠。大きな障害となること間違いない。

??さて、次のレースの呼び掛けはもう少し後だらう。

彼女の走りでほんの少しだけ気持ちが昂つてしまつた。なんでも良いから身体を動かしたい。

そう思つて、最後に軽く柔軟体操でもしようとグラウンドに出ると、キンイロリヨテイが得意気な顔で歩いてくるのが見えた。

「メジロシユトラールさん、見ていてくれましたか？ これが私の走りです」

「ああ、見ていたよ。正直驚いた」

「でしょ、でしょ。私の走りは上級生すらコテンパンにできると、白日の下に晒されたわけです」

「まあ、そうだね」

「要するに、上級生には私の相手になるウマ娘はもう居ないということですよ！」

それは流石にどうかと思うが。

とはいって、実際に彼女は上級生と走り、樂々と勝利をもぎ取つて見せた。少しばかりはある。

それに、勝つて嬉しそうにする彼女にわざわざ水を差す必要も無いだろう。
「つまり、メジロシユトラールさんも超優秀な私を頼つてくれて良いんですよ？」
て私は寛大なので？？お友達になつてあげても良い、ですよ？？？」

「ああ、それは大丈夫」

「なつ！？ ちよつと、それは大丈夫つてどういうことですか！？」

最後の方は声がか細くて聞き取れなかつたけど、そこは即答する。

ライバル候補の胸を借りるつもりは今のところ無い。

ドーベルとは昔馴染みで兄妹のように暮らしてきたから、一先ずぶつかる予定の無い
クラシックまでは互いに協力するつもりだ。??誰が何と言おうと兄妹である。姉妹で
はない。

マツクイーンやライアンは僕と狙うところが同じだから、そうとも言つてられない
が。

『準備が整いましたので、第二レースにエントリーしている生徒は所定の位置にお集ま
りください』

キンイロリヨテイが何事かを喚いていたが、無視してスタート位置まで向かう。

先程のキンイロリヨティの走りを見たからか、先輩方も気合いの入り方が違うように感じた。

新入生である僕メジロシユトラールと、そして彼女、

「あのうるせえアイツもまあまあやるみてえだが、アタシには関係無い。アタシは、メジロシユトラール、アンタをぶつ潰すだけだ」

「?? 望むところだ」

シルクライトネスが自分達の走りを脅かしかねないと、先輩方は警戒しているのだ。その気持ちは分かる。

トレーナーを得たい先輩方の焦りも大いに分かるが、僕だつて譲れないんだ。やりづらいことこの上ないが、やるしかないだろう。

全員、最終直線で抜く。

悪いが君もだ、シルクライトネス。

隣に立つ彼女を一瞥することなどない。

僕は前を見据えると、ただただその時を待つた。

□

「??」

隣に立つメジロのお嬢様から滲み出る、お嬢様とは思えないくらい恐ろしく冷たい霸気がアタシを突き刺す。

ああ、クソ。クソツタレが。

薄々分かつちやいたが、他のお気楽なヤツと違つて、コイツも色々背負つてんのか。
本当に、嫌になるな。

だけど、泣き虫のアツの為にも、アタシは負けるわけにはいかないんだ。
見てろよ、エリモジエントル。

落ちこぼれのアタシの走りで、臆病なお前だつてやれるつてこと、証明してやる。

第十二話 片鱗、または余波

『本日第二レース、芝1800コース、出場ウマ娘が出揃いました』

何処を見ても、腑抜けた面が揃つてやがる。センパイも大したことなさそうだ。

やつぱり、一番警戒しなきやなんねえのはお嬢様ただ一人。

お嬢様を倒した後も、アタシは並み居る同期を、そしてふんぞり返つてる皇帝サマ
だって倒さなきやならない。

アタシには、その全員をぶつ潰さなきやならねえ使命がある。

「負けても悪く思うなよ」

「??ああ」

「??ちつ」

??クソ。

何処までも落ち着き払つてやがる。アタシなんか敵ですらないってことか。

アタシより重いもん背負つてるつていうのか。顔色ひとつ変えず。

そんなコイツに腹が立つ。

でもつて、この二週間、コイツに勝てるビジョンが浮かばなかつたアタシのことが一

番腹が立つ。

『先のキンイロリヨテイもそうでしたが、今年は有望株が揃っていますね』

あの日、アイツの走りを見てから、アタシは本気のウマ娘の強さってモノを知つち
まつた。

もう今までのアタシみたいに、ほんの少しの才能だけでムカつくヤツやアイツをいじ
めるヤツを走りで負かせてなんてことは出来ない。

お嬢様に始まって、お嬢様二号やさつきの自信過剰野郎に、何考えてんのか分かんね
えあのウマ娘は、ガチだ。

けど、アタシにだつて負けられねえ理由があんだよ。

『各ウマ娘、位置について』

こんなアタシより余つ程才能があつて、いつつもビクビクしてるけど良いヤツで。

そんなアイツに託されてきてんだ、アタシは。

『スタートッ!!』

その掛け声に、一斉に駆け出した。

好位を争う逃げ、先行組を他所に、差し組に包囲されないよう後ろに下がる。

横目でちらりと窺えば、追い込み組はアタシとお嬢様の二人だけ。

またとない機会だ。

今のアタシの全力で、コイツを超える。

『最初の直線、誰も彼もが出方を窺う展開！』

普通なら、まだまだ仕掛け始めるには早い。

しかし、いやにスローペースだ。呑まれんのも面倒だし、仕掛けるなら早めの方が良いか。

直線も終わりに差し掛かつて、一步、また一步と踏み込む足に力を込める。

風を切り、過ぎ去る視界の中でアタシ以外は遅過ぎる。

『おおつと、早くもここでシルクライトネスが仕掛けた！ 大外を回つていく！』

「む、無理い〜！」

コーナーを大外から回つて、遅い展開に呑まれかかっているセンパイを抜かしていくば、何人かは釣られて加速して自爆していく。

その自爆して垂れたセンパイにお嬢様が阻まれてくれたら、なんて打算もあるがきっと思い通りにはならないだろう。

スイスイとセンパイを抜かしていくお嬢様の顔には、苦にした様子ひとつない。

『シルクライトネス、どんどん抜かしていきます！ これは上級生も為す術無しか!?』

あと二人。

あと一人。

「無理いつ!?」

最後の一人を抜かして、未だアタシに余力はある。
まだまだ足は残つてるんだ。アタシに勝ちの目は十分。まずは確実に一勝!
これでアタシが??!

『来た! ここでメジロシユトラールだ! 凄まじい足で内側を突く!』

アタシの走る反対側がにわかに騒がしくなつた。

実況が驚嘆に声を上げる。観客も同様だつた。

けれど、残り200メートル。もうゴールは見えている。

このまま、譲らなければ問題無い。

『なんと! メジロシユトラール、さらに加速していく! 脚色は衰えない!』

はたと気が付いた時、アタシは二番手だつた。

何が何だか、分からなかつた。

前を走つていたはずだ。そのアタシが追走していることに気が付いた時には、もう手遅れだつた。

前を走る後ろ姿の、靡く白いマフラーが遠い。

遠過ぎる。

??なんで? どうしてだ?

試合運びは完璧だつた。

どうして、アタシはその背を追い掛けている？

何故、こんなにも心が折れている？

『メジロシユトラール、実力を遺憾無く發揮して、今一着でゴールイン!! 追い縋るシル
クライトネスは四バ身差！ 強い！ 新入生にあるまじき強さだ!!』

その遠過ぎる背中を眺めながら、アタシはただ呆然とするしかなかつた。



「凄い！ 凄いよシユトラールちゃん！」

「お疲れ」

「ありがとう、サニー、ドーベル」

本当に凄い。

凄いとしか言えない走りだつた。

先輩をどんどん抜かしていくつて、最後にはシルクライトネスさんも追い越して。あそ
こに私がいたら、きっと路傍の石ころにすらなれない。

私なんかじや絶対に出来ないような、そんな走りだつた。

けど今度の選抜レース、私も頑張つてみようつて、そう思わせてくれる走りをシユトラールちゃんは見させてくれた。

「今度の選抜レース、私もやれるだけやつてみる！」

「ああ。頑張つてね、サニー！」

「??アタシも、シユトラールに埋もれないように走るから、そのつもりで」

「う、うん！」

そつか、ドーベルちゃんとも次はぶつかるかもしねないんだ。シユトラールちゃんに負けず劣らず強いあのドーベルちゃんと??。

でも、二人に追い付くつて誓つたんだから、私の全力でぶつかつていくしかないよね。

「私、二人に追い付けるように頑張るね！」

「ああ、楽しみにしてる」

「ええ、アタシも」

こんな素敵な友達と、こんな熱い青春を送れるなんて、トレセン学園に入つて良かつた！

私、サンデイブライアン、頑張ります！

□

「??やりますね」

流石は私のルームメイト。

圧巻の走りは、ちょっとだけ、ほんのちょっとだけ私の走りを超えているところが無くも有りませんでした。

さつきはどういうつもりか、この未来の最強ウマ娘である私の友達になるという名譽を拒まれましたけど、あの走りを超えたなら、メジロシユトラールさんも私の友達になりたいと懇願するはず。

「??あの、ちょっとごめんなさい」

「え？ あ、はい、どうぞ」

恐る恐るといった声、首だけ振り返つて見れば彼女は同期のサイレンスズカさん。

彼女には悪い事をしてしまいましたね。道を通せんぼしているとは思いませんでしたね。

この素晴らしい私が邪魔だなんて、本当は言いたくなかったに違いありません。だから、罪悪感でみんなに声が小さくなつてしまつていたのでしよう。

その時、私の天才的な脳裏に閃光が走りました。

つまり、彼女は友達が居ないのでしょう。

ならば、この私が彼女の友達第一号になつてあげなければ。

「サイレンスズカさん、もしよろしければ私が「何一人で突つ立つて喋つてんだよ」へ？」

勢い良く振り向いた私の前には、先程メジロシユトラールさんに慘敗したシルクライトネスさんの姿が。

しかし、その姿はどこか弱々しいもの。

あまりライバルになるかもしぬれない人に塩を送るような真似はしたくないんですけどね。

「貴女はメジロシユトラールさんに慘敗したシルクライトネスさんじやありませんか」

「??あ、あ、?」

「ひつ??そ、そんな風に睨み付けても、現状は私の方が強いんですから何も言い返せないでしよう？」

「??」

けど、それは現状の話です。

あのレース、メジロシユトラールさんが異常であつただけで、私とシルクライトネスさんが戦つていたら負けていたのは私かもしれない。

それだけ、彼女の走りは強かつた。それは認めます。負けてますけど。

「だから、私は貴女に勝負を挑みます」

「はあ？」

「私は一勝、貴女は一敗。ですが私はまだ貴女と戦っていない、それ即ちまだ勝つていな
いということ」

ならば、勝つ為には戦うしかない。

それがウマ娘として生まれた私たちの宿命。

「私と戦え、シルクライトネスさん。私は強いですから、貴女は負けてしまうでしようけ
ど」

「??くく、くくくく」

「?」

唚然としていたシルクライトネスさんは、どうしてか堪えるように笑い出す。

あれ、私何か変なこと言いましたか。

「くくく、お前、励ましてるつもりかよ」

「え、いえそんなつもりは」

「はっ、お前の名前は？」

ふむ。

名前を聞かれたなら、答えて差し上げるのが未来の最強ウマ娘である私の義務。

「私はキンイロリヨテイ、黄金の旅路を往く者です。この世代のトップに立つので、覚えておくと良いです」

「アタシはシルクライトネスだ「知つてますけど」??つたく、首洗つて待つてろよ」
??ふふ。

何はともあれ、少しは持ち直してくれたみたいで何よりですね。

「??アイツにも謝つとかねえとな」

「?」

なにやらシルクライトネスさんの独り言は聞き取ること叶いませんでしたが、どうせ
些事。

まずは目指せ、メジロシュトラールさん打倒！ ついでにシルクライトネスさん打倒
も！

さあ、私の黄金の旅路はこれからです！